

富山県福光町

梅原安丸IV遺跡

1997年3月

福光町教育委員会
富山県埋蔵文化財センター

序

福光町の東部に位置する北山田地区は山田川と大井川にはさまれた水田地帯ですが、東海北陸自動車道関連の発掘調査等で、縄文時代から近世までの様々な遺跡が発見され、多くの歴史遺産が埋蔵されています。

梅原安丸IV遺跡の発掘調査は、梅原北工業団地の造成に伴い実施しました。調査の結果、12世紀中頃から14世紀初頭にかけての屋敷跡、墳墓堂跡などが発見され多くの成果がありました。本書は、その調査結果をまとめたものです。出土品とあわせて、郷土の歴史の解明や学術研究等に活用していただければ幸いです。

この調査の実施にあたり、中越パッケージ株式会社福光工場・富山県埋蔵文化財センター・福光町シルバー人材センター及び地元住民の方々に多大なご協力を賜りましたことに対し、深く感謝するものであります。

平成9年3月

福光町教育委員会
教育長 石崎栄一

例　　言

1. 本書は、福光町梅原北工場団地造成に伴う富山県福光町梅原安丸IV遺跡の発掘調査概要である。調査は、平成6年から同8年までの3カ年にわたりて行い、調査面積はあわせて3,620m²である。年度ごとの調査期日と発掘面積は次のとおりである。

平成6(1994)年 5月9日～6月10日 1,140m²

平成7(1995)年 5月8日～6月16日 1,300m²

平成8(1996)年 4月15日～5月17日 1,180m²

2. 調査は、福光町都市振興課の委託を受け、福光町教育委員会が実施した。調査にあたっては、富山県埋蔵文化財センターから調査員の派遣を受けた。

3. 調査事務局は福光町教育委員会生涯学習課において。調査事務および調査担当者は次のとおりである。

(調査事務) 平成6年 教育次長兼生涯学習課長 飯田 淳・文化係長 鳥越知証

平成7年 教育次長兼生涯学習課長 辻澤 功・文化係長 鳥越知証

平成8年 生涯学習課長 西村勝三・文化係長 加藤 仁

(調査担当者) 平成6年 富山県埋蔵文化財センター主任 久々忠義・同文化財保護主事 境 洋子

平成7年 生涯学習課主事 佐藤聖子・富山県埋蔵文化財センター主任 久々忠義

平成8年 生涯学習課主事 佐藤聖子・富山県埋蔵文化財センター主任 久々忠義

本書の執筆は、富山県埋蔵文化財センターの協力を得て調査担当者が行った。執筆分担は各文末に記した。

4. 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々の協力・助言があった。記して謝意を表する。

池野正男・上野 章・越前慶祐・往藏久雄・岸本雅敏・神保孝造・太嶋 勇・西井龍儀・林 敏三・前田 康・

溝口博文・宮田進一・桃野真晃・吉田敏信(敬称略・五十音順)

5. 本書で使用した方位は真北である。土層の観察には、小出正忠・竹原秀雄編著1967『新版標準土色帖』日本色研事業株式会社を用いた。

目　　次

I 位置と環境	1	V 付論	13
第1図 位置と周辺の遺跡	1	第6図 遺構図4	17
II 調査に至る経過	2	第7図 遺構図5	18
第1表 遺跡の概要	2	第8図 遺構図6	20
第2図 遺跡の範囲と発掘調査位置	3	第9図 遺構図7	21
III 調査の概要	4	第10図 遺構図8	22
1. 調査の経過	4	第11図 遺構図4	23
2. 調査の方法	4	第12図 遺構図5	24
第3図 地形と区割	4	第13図 遺構図6	25
第4図 安丸IV基本土層	5	第14図 遺構図7	26
第5図 遺構配置図	7	図版1～9	
IV まとめ	12	報告書抄録	
参考文献	12	付図 遺構全体図	

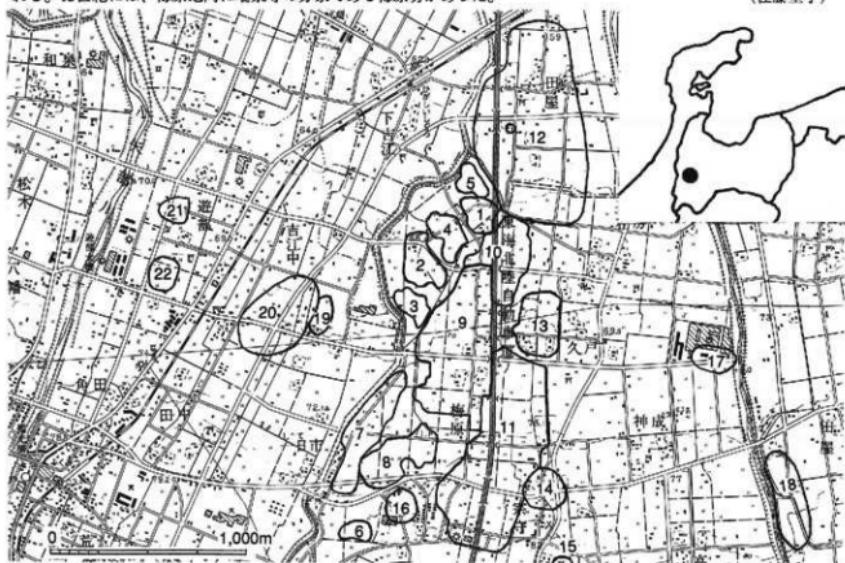
I 位置と環境

梅原安丸IV遺跡は、富山県福光町梅原地内に所在する。福光町は、石川県との県境をなす富山県の南西部に位置し、県境には、養老三年(719年)、泰澄大師によって開山されたといわれる医王山をはじめとするなだらかな山脈が連なる。上平村と接する南側に位置する大門山に源を発する小矢部川が、町の中心部を南北に貫流し、その東を流れる山田川とともに、町の東北部から北に向かって広がる砺波平野を形成している。

本遺跡は、小矢部川の支流である大井川右岸の河岸段丘上に位置する。標高70~80m前後を測る周辺には、梅原安丸・梅原出村・梅原落戸・梅原胡摩堂・梅原上村・梅原加賀坊・田尻・久戸の各遺跡が密集している(第1図参照)。梅原安丸・梅原加賀坊・田尻・久戸の各遺跡は、東海北陸自動車道を建設する際発掘調査が行われ、12世紀中頃から18世紀にかけての大集落跡が発見された〔富文振1994〕。この南後方には、うずら山・宗守・竹林I・竹林II・東殿・徳成などの縄文時代を中心とした遺跡が存在する。また、梅原胡摩堂遺跡6・7地区からは弥生時代中期の土器・管玉・石器が出土し、梅原安丸III遺跡では古墳時代の堅穴住居跡1棟を検出しており〔福光教委1991・1994〕、原始時代から今日まで連続と人々が生活していたことがわかる。

文献資料では、古代には福光町の一部が砺波川上郷に含まれていたとされている。平安時代には川上村と呼ばれ官倉が置かれていたことが知られる。11世紀には円宗寺領石黒庄が成立し、当地域はそのうちの山田郷の一部に比定される。15世紀には、梅原地内に瑞泉寺の分家である梅原坊があった。

(佐藤聖子)



第1図 位置と周辺の遺跡

1. 梅原安丸遺跡
2. 梅原安丸II遺跡
3. 梅原安丸III遺跡
4. 梅原安丸IV遺跡
5. 梅原安丸V遺跡
6. 梅原出村II遺跡
7. 梅原出村III遺跡
8. 梅原上村遺跡
9. 梅原落戸遺跡
10. 梅原加賀坊遺跡
11. 梅原胡摩堂遺跡
12. 田尻遺跡
13. 久戸遺跡
14. 宗守遺跡
15. 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡
16. うずら山遺跡
17. 久戸東遺跡
18. 田屋川原古戦場
19. 田中遺跡
20. 仏道寺跡
21. 遊部城跡
22. 常楽寺跡

II 調査に至る経過

平成元年（1989）、遺跡の所在する梅原地区において、大区画は場整備事業計画が策定された。しかし、計画地内は、東海北陸自動車道の建設に伴う調査で梅原安丸遺跡などの存在が知られていたことから、計画地内への遺跡の広がりが想定された。そのため、教育委員会では県埋蔵文化財センターより調査員の派遣を受けて、平成元年度に計画地内の北部、安丸地内で遺跡分布調査を実施した。その結果、広範囲に遺物が散布することがわかり、平成2年度には、遺跡の範囲や遺存状況を確認するため試掘調査が行われた。調査の結果、遺跡は旧河跡などを境に梅原安丸、梅原安丸Ⅱ、梅原安丸Ⅲ、梅原安丸Ⅳ、梅原安丸Ⅴの5遺跡に分けられた。

一方、町都市振興課では、梅原安丸地内で工業団地を造成する計画を立てていた。ほ場整備に伴う試掘調査の結果を踏まえ、必要面積を確保し、できるだけ遺跡地をはずすという点から協議された結果、梅原安丸Ⅳ遺跡の北側が選ばれた。しかし、遺跡地を完全にはずすことはできず、約4,000m²がその敷地に含まれることになった。平成2年、立地企業は遺跡地をはずして工場を建設、操業を開始した。遺跡地は盛り土され、当面の間グラウンドとして利用されることになった。

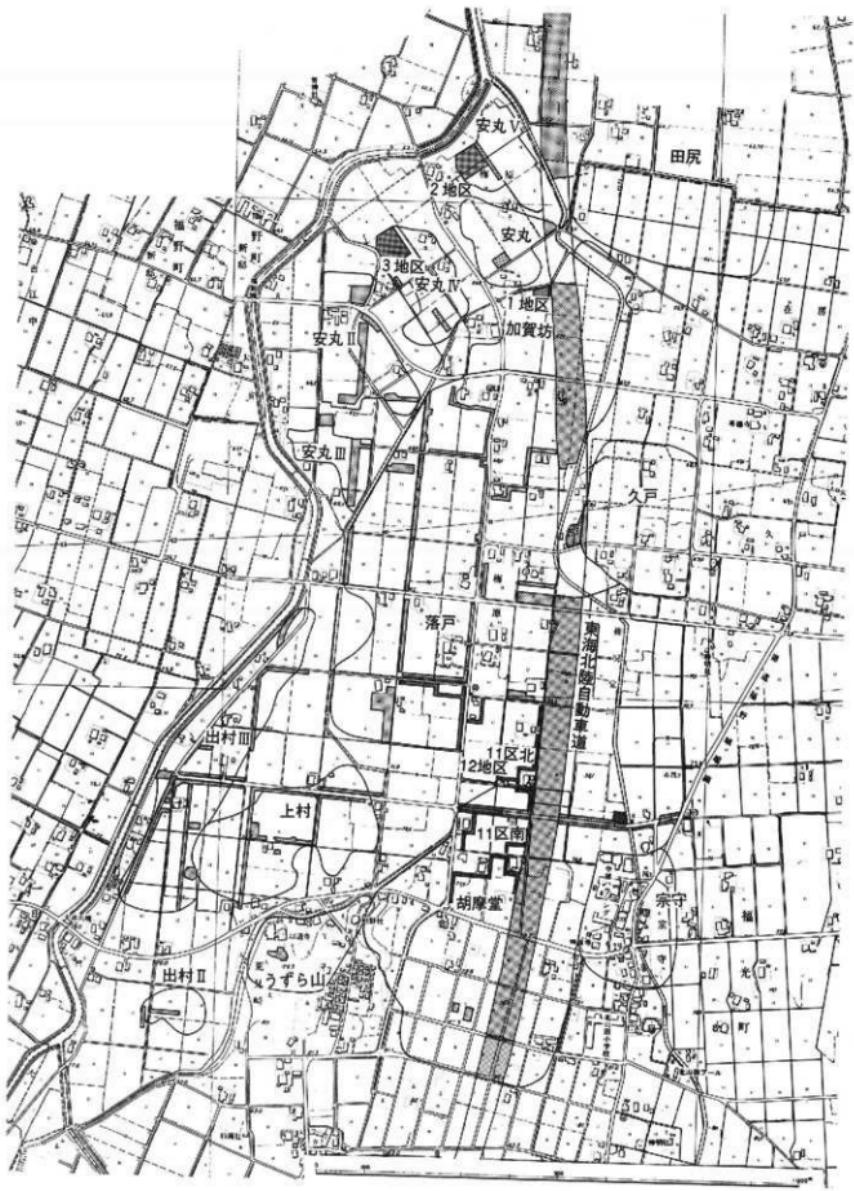
平成5年、企業からそのグラウンドに新工場を増設する計画が町都市振興課に出された。そこで、同課から教育委員会への発掘調査の依頼が出された。教育委員会では、ほ場整備事業に伴う調査を行っている最中でもあり、単年度で調査を終了することがむずかしいため、平成6年から同7年までの3カ年に分けて調査を実施することとした。

なお梅原地内では、ほ場整備事業などにともない十数カ所の地点で発掘調査を実施してきた。その調査概要および調査地内は、第1表・第2図のとおりである。

（久々 忠義）

第1表 遺跡の概要

No.	遺跡名	所属時代	発見された遺構	発見された遺物
1	梅原安丸	縄文、中世、近世	掘立柱建物柱穴、穴、溝、豊穴、井戸、池底遺構	上部質土器、珠洲、磁器、漆器、五輪塔、石臼、下鉢
2	梅原安丸Ⅱ	縄文（後期）、古代、中世、近世	掘立柱建物、同柱穴、溝、井戸、土器溝まり	縄文土器、石器、須恵器、漆器柄、土師質土器、珠洲、陶磁器
3	梅原安丸Ⅲ	縄文（後期）、古墳、古代、中世、近世	豊穴住居跡（古墳）、掘立柱建物、柱穴、穴、溝、井戸	縄文土器、石器、須恵器、土師器、土師質土器、珠洲、陶磁器
4	梅原安丸Ⅳ	縄文か、古代、中世、近世	掘立柱建物柱穴、穴、溝、豊穴状遺構、井戸	縄文土器、須恵器、土師質土器、珠洲、陶磁器
5	梅原安丸Ⅴ	縄文か、古代、中世、近世	掘立柱建物、掘立柱建物柱穴、穴、溝、井戸	縄文土器、須恵器、珠洲、土師質土器、陶磁器、曲物底板
6	梅原出村Ⅱ	縄文（晚紀）、古代、中世	柱穴、穴、溝	縄文土器、石器、須恵器、土師質土器、珠洲、銅鏡、銅製キセル
7	梅原出村Ⅲ	縄文、古墳、古代～中世、近世、近代	豊穴住居跡、柱穴、穴、溝、井戸、遺物包含層（縄文・古代）	縄文土器、石器、須恵器（墨書き土器）、土師器、土師質土器、珠洲、越前、鉢質
8	梅原上村	縄文、古代～中世、近世	柱穴、穴、溝、遺物包含層（古代）	縄文土器、石器、須恵器、土師器、珠洲、越前、八咫？、南朝御石臼、古鏡
9	梅原落戸	縄文、弥生、古代、中世、近世	川、穴、遺物包含層（縄文）、掘立柱建物（含草葉）、土坑（古代）、掘立柱建物、道路、土坑、溝（中世）、溝（近世～近代）、柱穴	縄文土器、石器、弥生土器、内巻土器（古墳）、須恵器、土師器、土製品、銅鏡、馬鹿、灰瓦、稻子、骨片、木製品（古代）、土師質土器、珠洲、常滑、越前、繩目美濃、輸入陶磁器、土製品、木製品、製塙土器、火鉢、羽口、小柄、铁斧、銅鏡（中世）
10	梅原加賀坊	縄文、古代、中世、近世		縄文土器、須恵器、土師器、土師質土器、珠洲、磁器



第2図 遺跡の範囲と調査区位置 (1万分の1)

III 調査の概要

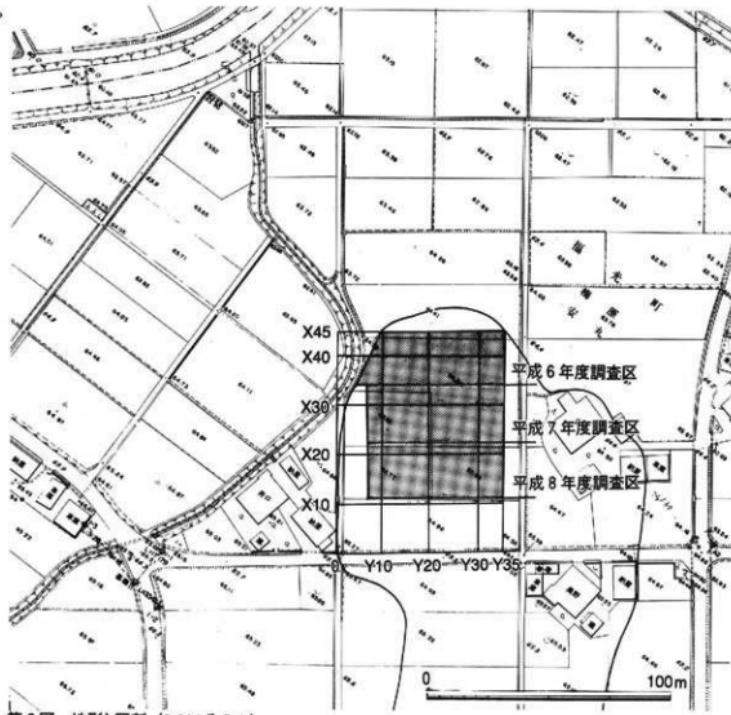
1. 調査の経過（第3図）

調査は、新工場建屋部分および道路部分の本調査である。発掘は、平成6年から8年までの3カ年に分けて実施した。平成6年は、調査対象地の北部を、5月9日から6月10日まで、 $1,140\text{m}^2$ を発掘した。平成7年は、調査対象地の中央部を、5月8日から6月16日まで、 $1,300\text{m}^2$ を発掘した。平成8年は、調査対象地の南部を4月15日から5月17日まで、 $1,180\text{m}^2$ を発掘した。

2. 調査方法

調査は、まず重機により、盛り土および道路の簡易アスファルトと旧水田の耕土を掘削除去した。その後、基準杭の設置及び調査区割を行った。調査区割は、調査区の形に応じておむね南北方向にX軸、東西方向にY軸をとり、それぞれ2mを一区画としてアラビア数字でその位置を示した。調査は3年にわたるが、区割りは共通基準で行った。

包含層の掘削・遺構検出・遺構掘削等は人力で行い、遺構平面図の作成は、ラジコンヘリで撮影した写真から図化した。



第3図 地形と区割 (2,000分の1)

3. 調査の概要

(1) 地形と層序 (第2・3図、図版1)

調査区は海拔64～65mで、地形は西方と北方が低く、大井川の旧河道である。地表から黄色土の地山面（遺構確認面）までの深さは35～40cmで、その間は大きく4層に分かれる。①層は現代の耕作土、②層は大正時代のは場整備時の盛土、③層は黒色土で中世の堆積と考えられる。④層は黒色土で縄文時代の遺物が含まれる。

①層	耕作土
②層	盛土
③層	黒色土
④層	黒色土 縄文
	地山

(2) 遺構 (第5～10図、図版1～4、付図1)

中世の掘立柱建物5・墳墓堂1・塙2・大溝2・小溝11・土坑3などがある。また、明治時代以降の土坑・暗渠（SD01・06、SK01・02）、風倒木痕がある。

掘立柱建物

SB01～05のあわせて5棟がある。SB02～04は、堀と考えられるSD04・18と塙とみられるSA02・SD28に区画された中に重なりをもつてある。建物の棟方向はほぼ南北にあるが、真北に対して3～22度の幅で変動がある。建物SB01は側柱建物であるが、その他は総柱建物である。

SB01・SA01

調査区の北西部にあり、他の建物と重なりがない。南側1.6mに柱列SA01がある。工場の水道管が横断していて柱穴2本が破壊されている。南北2間(5.4m)×東西2間(4.4m)の南北棟の側柱建物である。棟方位は北に対して約10度東へ振れる。床面積は約23m²で、建物群の中でも小型である。柱間寸法は、桁行は2.6+2.8m梁行は2.4+2mで、南側の中柱が少し東へ寄っている。柱穴の掘方は30cm前後の丸いもので、深さは30～40cmである。柱は残っていないが、柱穴の大きさから、柱の太さは20～40cmほどであったと推定できる。SA01は径30cm深さ20～30cmの3本の柱穴列である。長さ5.3mで、軸方位は北に対して70度西に振れる。いずれも出土遺物はなく時期は不明である。

SB02

SB05と重なりがある。周囲を雨落ち溝とみられるSD09・22が囲んでいる。東西2間(4.7m)×南北6間(15.9m)の南北棟の総柱建物である。北側2間分は柱穴が浅く、北西隅の柱穴がはっきりしないので、のちの拡張あるいは東側1間分で納屋のような別の建物を構成していた可能性がある。

棟方位は北に対して約30度東へ振れる。床面積は約70m²または55m²である。柱間寸法は、梁行は2.3+2.4mで、桁行は2.6+2.75+2.95+2.9+2.45+2.3mである。桁行の柱間寸法は両妻側が狭い。柱穴の掘方は40～50cmの丸いもので深さは10～75cm。中柱列が浅い。柱は残っていないが、柱穴の土層の違いから柱の太さは15cmほどであったと推定できる。

雨落ち溝SD22は、建物東側のP12とP15の間に面するところが幅がやや狭くなっている（P6・9・12、P15・16の間が広いというべきかもしれない）。このことは、その部分の屋根の構造が他とは違っていたことを表しているとみることができる。おそらく、そこがこの建物の出入り口であったものであろう。入り口の突きあたりには、建物内での作業に伴うとみられる穴SK08があることは、出入り口にあたる部分が土間であったことを示しているのかもしれない。出土遺物は、P4・7からロクロ土師器皿が出土しており、時期は12世紀後半とみる。

SB03

SB05南東にあり、東側が調査区外へのびる。南北2間(4.7m)東西3間(6.9m)以上の東西棟の総柱建物である。

棟方位は、北に対して約68度西へ振れる。床面積は約 32.5m^2 である。柱間寸法は、梁行は $2.2+2.5\text{m}$ 桁行は西から $2.1+2.4+2.4\text{m}$ である。柱穴は、径 $25\sim35\text{cm}$ 深さ $30\sim55\text{cm}$ である。柱は残っていないが、柱穴の大きさから柱の太さは $10\sim15\text{cm}$ ほどであったと考えられる。出土遺物はないが、方位から13世紀代とみる。

SB04

SB02の東北にあり、北側が調査区外へのびる。SB02の雨落ち溝と重なるので、それと新旧関係がある。東西3間(6.9m)南北3間(6.7m)かそれ以上の東西棟の総柱建物である。棟方位は北に対して約57度西へ振れる。床面積は約 46m^2 かそれ以上である。柱間寸法は、梁行 $2.2+2.2+2.3\text{m}$ 桁行 $2.2+2.3+2.4\text{m}$ である。

柱穴の掘方は $20\sim40\text{cm}$ の丸いもので、深さは $15\sim45\text{cm}$ で、南側から二列目の柱列が深い。柱は残っていないが、柱穴の大きさから、柱の太さは $10\sim15\text{cm}$ ほどであったと推定できる。建物中央に土坑P14がある。P14は一辺 $50\sim60\text{cm}$ 深さ 30cm である。出土遺物はないが、SD09と関連があるので、時期は14世紀とみる。

SB05

SB02の西南で重なる。東西3間(3m)×南北2間(7m)の東西棟の総柱建物である。棟方位は北に対して約57度西へ振れる。床面積は約 21m^2 である。柱間寸法は、梁行は 1.5m 桁行は $2.2+2.4+2.4\text{m}$ である。柱穴の掘方は径 $25\sim50\text{cm}$ の丸いもので深さは $30\sim60\text{cm}$ 、中柱列が浅い。柱は残っていないが柱穴の大きさから柱の太さは 15cm ほどであったと考えられる。出土遺物はないが、SA02と平行することから13世紀後半代とみる。

墳墓SD05・SK05

調査区中央にあり、建物群の西側を区画する堀SD04の外側に位置する。

墓坑SK05を区画溝SD05が巡る。SD05は、北・南・東側が上幅約 70cm 深さ 20cm 、西側は溝が二重になっており、内側溝は上幅 90cm 深さ 30cm 、外側溝は幅 1.6m 深さ 40cm で、外側(西側)にやや張り出すように曲がっている。この外側溝は、墓の前面に作られた池と考えられる。東側溝は堀SD05と約 30cm の間隔をおいて接し、その間は地山は深さ 10cm 掘り込まれている。このことは、この段差を通してSD04からSD05へ水を取り込むための造作とみられ、SD05には水が張ってあったと考えられる。西側の内側溝の中央部では溝底が一段深くなっている。池のある西側が正面とみられるから、その部分は墓の入り口にあたり、おそらくそこには橋がかかっていたと想像される。周溝で区画されたあの世界と現世世界の境界を特に意識したものとも考えられる。

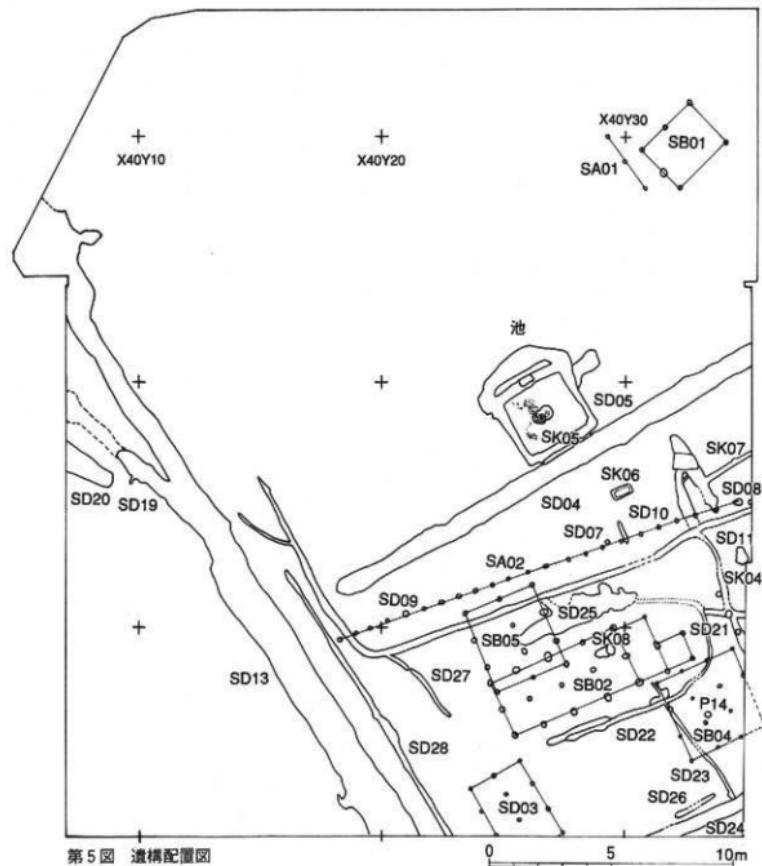
SD05で区画された空間は、東西 5m 南北 5.5m の方形である。西側が正面とみられるから、奥行きに比べ幅がやや広いといえる。区画の軸方位は北に対して 66 度西へ振れる。正面から墳墓堂を見る方向には、牛岳という古くから信仰の対象とされる山が見える。またその真下にあたるところには、北陸における真宗の拠点寺院である瑞泉寺が立地している。

区画のほぼ中央に、長さ 1.7m 幅 $90\text{cm}\sim1.1\text{m}$ 深さ 5cm の雪だるま形をした土坑SK05がある。土坑内の覆土は、 10cm 以下の河原石と炭・灰・骨粉を含む灰黒色土であり、土を洗ったところ、炭化米・桃の核も検出された。骨粉は火葬した人骨とみられ、土坑は墓穴である。墓穴は径 1m 前後の二つの墓穴がつながっているものとみられ、雪だるまの胴体にあたる北側の穴が区画の中央に位置するから、この部分が古い埋葬で、南側が新しい埋葬部と考えることができる。

河原石は、SK05の西側と南側にややまとまって残っていた。石の直上まで、近代以降の土層が覆っていたので、石の総量がこれだけなのか失われたものがあるのかは不明である。ただ周溝内には石はほとんどみられないから、区画内が全面的に石で覆われていたとは思われない。おそらく土坑の上面を覆う程度であったものであろう。土坑内には藏骨器とみられるものではなく、石も土坑の底に接してあることから、いつの時点でき抜き取られたものと考えられる。南側の石群に混じって珠洲すり鉢の破片があった。すり鉢は藏骨器の蓋として使われることが多いので、

土坑内には珠洲焼などの蔵骨器が納めてあったのであろう。石群は地山面より5cmほど浮いた状態で発見された。地山面との間は黒色土で、縄文時代の土層である。石は中世の土層中に含まれているとみられる。また、周溝に盛り土が流れ込んだ様子も見られない。のことから、区画内は壇状の盛り土があったとは考えられず、低平な状態であったと想定される。そのように考えると、土坑の本来の深さはせいぜい15cmほどの浅いものである。珠洲の蔵骨器が埋められていたとすれば、おそらくその上部は地上に露出して可能性があろう。そのように考えてみると、それを覆う上屋があったと見なければならない。区画内に上屋があったことを証拠たる柱穴などは発見されなかつたが、池を配した墳墓の形態から、この墓の造営にあたり、淨土式庭園がイメージにあったものと考えられるから、この墓坑の上には、阿弥陀堂をイメージした堂が建っていたことであろう。

出土遺物は、中央墓坑内から12世紀後半から13世紀前半代の土師器皿が、石群に混じって14世紀前半の珠洲がある。出土遺物の年代と埋葬部が2カ所あることから、墳墓堂の時期は13世紀前半から14世紀前半代までと考えられる。



第5図 遺構配置図

土坑SK06・07

墳墓堂の東側、建物群との間にある。

SK06は、長辺1.65m短辺85cm深さ25cmの長方形の土坑である。形態および覆土の状況から木棺墓と推定される。覆土は壁面に沿って幅10~20cmだけ地山黄色土の混じりが多い土で、木棺の回りの埋土と考えられる。その内側は黒褐色であり、その部分が木棺にあたるとみられ、その大きさは幅55cm長さ125cmであったと考えられる。軸方向は北に対して27度東に振れる。

SK07は、SK06の南東約4mにある穴である。穴は径50cm深さ15cmほどで、掘り込みが地山に達していない。覆土は焼土・灰を多く含む黒色土であり、小児墓あるいはその他の埋葬に関わる穴とみられる。

SK06・07は、出土遺物がなく時期は不明であるが、墳墓堂に隣接した墓地を形成していたと考えられるから、ほぼ同時期のものであろう。

塚SA02・SD28

SA02はSB02・05の西側に並ぶ南北方向の柱穴列である。柱と柱の間に横板を落とし込む縦板塚であったと考える。柱穴は径約30cm深さ30~70cmのものが35あり、長さは約35mである。柱根は残っていないが、柱穴の大きさから柱は径15cmほどであったと考えられる。軸方向は北に対して39度東に振れる。北側はさらに調査区外へ延びているものと考えられる。柱間隔は1.6mを基準としているが、P21~23とP13・14の間が1.4mとやや狭くなっている。前者はSD09を跨ぐ所であり、それと重ならないためあるが、後者は西側への出入り口があったためかもしれない。出土遺物は、P2から土師器が出土しているが時期は不明である。SD09の存在が意識されていること、SB02と柱並びが描うことから、13世紀後半代と考えられる。

SD28は、SB03の南に通る東西方向の溝である。縦板を埋めて並べた縦板塚と考えられる。幅30cm深さ30cmで、断面はV字形であるが、壁面は南側が直立ぎみで、北側はややゆるい。覆土は黄色混じり黒褐色粘質土で、地山との識別がむつかしかった。このことから、縦板を南壁に沿わせて立て、北側を埋めて固定したものとみられる。この溝は、平成7年の調査ではこれを暗渠と判断したSD15と連続するかのようである。しかし、覆土も平成7年に調査した溝とは違うと思われる。南に平行しているSD18との幅はSD28との間は幅2mであるが、SD15との間は2.5~3mと広い。SD28とSD15とは連続しているようにみえるが実際は別の溝と考えられる。その境はX22列にあり、ここは建物群の西側を画するSD04の延長線上でもある。また、建物群からの排水溝がSD28の西側で南側へ分岐していることも、SD28がX22区で止まるものであることを示しているのである。

出土遺物はないが、軸方向が墳墓堂など共通していることから、13世紀前半代に作られたものであろう。

塚SD04・SD18~20

SD04は、建物群と墳墓堂の間にあり、建物群の西側を画し墳墓堂の周溝へ給水する役割をもつ南北方向の溝である。上幅1.6m底幅1.1m深さ40~50cmで直線的な溝である。南端がSD09の手前で途切れるので、水は調査区外へ延びる北側から供給されることになる。覆土は酸化鉄分を多く含む暗オリーブ褐色土である。

SD18は建物群の南側にある。上幅2.5m深さ40cmで、底部は中央が低い舟底状である。最下層は黒褐色の砂疊土であるから、水の流れがある川であったことがわかるが、直線的であることから建物群の南を画する堀の役目をもつた人工的なものである。調査区の西端で自然河川とみられる川に合流している。また、西寄りでは、SD19・20が分岐している。

出土遺物は、SD04から12世紀後半から13世紀前半の土師器皿、SD18から同時期の土師器・珠洲・青磁・白磁・漆器碗などの木製品、SD20から14世紀代の珠洲が出土しており、堀として機能していた時期は13世紀から14世紀にかけてとみられる。

なお、平成2年に行われた試掘調査では、建物群の東を画する堀が検出されている。北側の広がりを遺跡の境までとすると、建物群は東西約50m南北60m面積約3,000m²の屋敷地の中にあると考えられる。

満SD07・09・11・21～27

建物群の周囲に幅が20cmから1mの溝がある。

SD07は調査区中央北寄りにある幅約40cm深さ15cmのもの。SD04と平行する。出土遺物は土師器皿があり、時期は13世紀とみる。

SD09は幅60cm深さ10cmの溝で、SA02の東側にはほぼ平行に通り、南側で西側へ屈曲しSD28に平行して屋敷外へ抜けれる。SD10・11はSD09に直交し、接続するとみられる。SD27もSD09へ接続している。遺物は、SD09・10から土師器皿が出土しており、時期は14世紀代とみる。

SD22は、幅30cm前後深さ13cmのSB02の東側と北側にある雨落ち溝である。SB02 P 6・9・12とP 15・18の間の軸先下にあたるところは幅40cm深さ5cmの深い溝と二段になっている。その部分の屋根の形態が他の部分と異なることを反映しているものであろう。

SD25は、SB02の西側にある長さ11m幅1～2.5m深さ15cmの池状のものである。試掘溝が横断しているのでよくわからないが、SD25とつながる可能性がある。遺物は、SD22から土師器皿が出土しており、時期は12世紀後半である。

SD23は、幅20cm深さ3cmで、調査区東北にある東西方向の溝である。SB04と重なりがある。出土遺物はなく時期は不明である。

SD24は、幅1m深さ30cmで、調査区東北隅にある南北方向の溝である。SB02と軸方向が共通する。出土遺物は土師器皿があり、時期は12世紀後半とみる。SD26はSD24の西側に平行する幅50cm深さ10cmの溝である。時期は不明。
遺構の変遷

以上のように、中世の遺構は12世紀後半から14世紀前葉の間に継続的に作られたものである。遺物の時期や軸方位を参考にその順序を整理しておく。もっとも古い遺構はSB02・SD22・SD25・SD24で、12世紀中頃から後半に作られたと考えられる。その後13世紀に入ると、SD04・18・26で屋敷地が区画され、墳墓SK05・SD05が作られた。その頃には建物はSB03～05に立て替わっていたと思われる。SB03～05のうちどれが古いか、あるいは同時存在かはよくわからない。SA02・SD09・10・11が13世紀後半以降に設けられたと考えられることから、SB04はその軸方位に近く、SB04が最も新しい時期の建物であろうか。SA02は、屋敷地内にSK06のような墓が作られたために、それを区画する意味で設けられたのかもしれない。

(3) 遺物 (第11～15図、図版7～9)

縄文時代、奈良時代、中世のものが整理箱で約10箱ある。

A. 縄文時代

縄文土器（1～22）・磨製石斧（図版7）、打製石斧（図版7）・凹石（図版7）がある。縄文時代の包含層および中世の遺構内から出土した。

1・2は直立する口縁部に4～5条の平行沈線を巡らす鉢である。3・4・22は胴上で少しきびれる口縁部が外反する深鉢である。胴部くびれ付近に平行沈線を巡らす。5は肥厚した波頂部に円形刺突を施し、口縁部に平行沈線を巡らす深鉢である。6は波頂部が肥厚し、口縁部に2条の沈線を巡らす深鉢である。7は注口土器と思われる。胴部下半部との境に凹線が巡る。8は底部近くに2条の沈線を巡らし、底部裏面にも十字と円を描く小型土器である。9は台形の波頂部をもつ深鉢で、内外面に斜縄文と三叉文が施される。10は外反する口縁部に、貫通孔と三叉文・2個の縱長突起が付く鉢である。11は外面無文、内面は口縁部に縄文帯を施す浅鉢である。12は口唇部に縄文、口縁部内面に指頭圧

痕が巡る鉢。13は外面無文、内面は肥厚した口縁部に沈線が巡る浅鉢。14・15は内外面無文、口縁部が肥厚した鉢。16は外面横方向の条痕文がある深鉢で、口縁部がやや厚い。17は外面斜綱文の深鉢。18は内外面無文の深鉢で、口縁端部が反る。19は平行沈線の間に列点を施す深鉢。20は外面に横方向の条痕がある深鉢。21は外面に斜め方向の条痕文があり、口唇部に刻みを巡らす深鉢。23は外面に縱方向の条痕がある深鉢である。条痕は八ヶ目のようにもみえ、土師器であるかもしれない。それぞれの時期は、19は摩滅しており後期中葉（酒見式）、20・21は晩期（中屋式）、その他は後期末（井口第Ⅲ・Ⅳ期、本江広野新期）とみる。

磨製石斧は3点あり、刃部幅が4cm、5cm、6cmのものがある。打製石斧は47点ある。形態的には両側刃が平行する短冊形、両側刃が内側に済曲する分銅形A類、基部が小さく刃部が広い撥形、側刃のくびれが基部の近いところで強い分銅形B類に分けられる（第15図）。側刃に、斧柄に装着に関わると考えられる叩打のあるものと、叩打が認められないものがある。後者は分厚く重いから未完成品であるかもしれない。打製石斧は2本が並んで出土したところがある。その横には炉石のような河原石がある。このあたりに堅穴住居跡があったのであろう。

B. 奈良時代

須恵器（25～28）がある。

24～27は須恵器の高台杯。28は須恵器瓶である。26は高台が小さいので9世紀代に下るかもしれないが、その他は8世紀前半とみる。須恵器は図示したもののはかに杯蓋・タタキ目のある甕の破片もある。

C. 中世

土師器、珠洲、越前、青磁、白磁、瓦器、フイゴの羽口、炭化米、桃の核、漆器その他の木製品がある。

掘立柱建物SB02（29～31）

29～31はいずれもロクロ土師器（底に回転糸切り痕がある）の皿または碗である。29はP4、30はP2、31はP7から出土した。時期は12世紀後半とみる。

墳墓SK05・SD05（32～36）

32は口縁部をヨコナデした土師器皿である。中心の墓坑SK05から出土した。時期は13世紀前半とみる。33はロクロ土師器皿、34もロクロ土師器の皿で、底部が厚く高台状となる。底部の糸切り痕は残していない。35は珠洲甕・壺の胴部で、3cmあたり9条のタタキ目がある。33～35はSD05から出土。36は珠洲すり鉢である。口縁部形態は、大屋窯あるいは法住寺第三号窯出土品に類似がある。吉岡康福氏による珠洲編年の第IV 1・IV 2期（13世紀末～14世紀初頭）にあたるものとみられる。墳墓堂上の南寄りにある集石付近から出土しており、藏骨器の蓋の一部ではないかと考えられる。

SD04（37～39）

37はロクロ土師器皿、38はロクロ土師器碗である。39はヨコナデ土師器皿である。37・38は12世紀後半、39は13世紀前半とみる。

SD07（41・42）

41は口縁部が外反するが端部で受け口状に内傾するヨコナデ土師器皿。42も口縁端部が少し立つ土師器皿。いずれも13世紀前半とみる。

SD10（40）

40は口縁部が強く立つヨコナデ土師器皿である。時期は14世紀代とみる。

SD18・20（43～52・58・59）

43は珠洲の甕である。口縁部は断面が方形のものは、大屋窯あるいは法住寺第三号窯出土品に類似があり、珠洲編年の第IV 1・IV 2期（13世紀末～14世紀初頭）である。44～46はロクロ土師器の碗または皿である。46は底部が高台

状で刺突状の穴がある。47はヨコナデ土師器皿である。48は珠洲の壺。49は外面に蓮弁文がある青磁碗。50は玉縁の白磁碗。51は同類の底部とみられる。52は内面に割花文がある青磁皿である。44~46・50~52は12世紀後半代、48・49は13世紀代に用いられたものとみられる。58は内外面黒漆の漆器碗である。高台裏は漆が塗られていない。口径に比べ器高が低い形態などから、13~14世紀代のものとみられる。59は山形の板で、頂部は水平に面取りする。そこに釘穴のような穴がある。両端にも穴があり中に断面Cの字形の竹釘とみられるものがはさまっていた。何かに固定されていたものとみられるが、性格はよくわからない。

SD22 (53~55)

53はロクロ土師器皿、54・55はロクロ土師器で碗であろうか。時期は12世紀後半代である。

SD24 (56)

56はロクロ土師器皿である。12世紀代であろう。

包含層 (60~117)

60~78・89・90はロクロ土師器である。60・61は皿、64~68・70は碗、底部が高台状の69・71~76、底部に刺突状の穴がある77・78がある。これらは12世紀後半代のものとみる。89・90は薄い器壁で、口縁部が外反し端部でわずかに立つもので、16世紀代のものとみる。80~88はヨコナデ土師器の皿である。口縁部と底部の境が明瞭でない80~81(1類)、口縁部がやや長く伸びて内傾する83~86(2類)、口縁部と底部の境がくの字になる88(3類)がある。1類・2類は13世紀代、3類は14世紀代とみる。

91~109は珠洲である。91~96は胴部にタタキ目がある壺・壺類である。91は口縁部が外反するもので、珠洲編年第二期(13世紀前半)、92は矢羽状のタタキ目があり珠洲編年第三期(13世紀後半)、94はタタキ目が斜めと水平の組み合わせで珠洲編年第四期(14世紀)とみる。97~109はすり鉢である。97は口縁端部が薄く水平で第一期(12世紀後半)、98~100口縁端部が外傾するもので珠洲編年第二期(13世紀前半)、101~104のおろし目はこの時期のものであろう。101は口縁端部が水平で広く第四期(13世紀末~14世紀初頭)、106・107は口縁端部が幅広くてやや内傾し、横描波状文が施されるもので、珠洲編年第六期(15世紀後半)である。108~110はオロシ目が密なもので、14~15世紀代のものであろう。

111は内外面黒色の瓦質土器である。外面に沈線と梢円形スタンプ文がある。薄手であるから香炉であろうか。木棺墓SK06の東北方向(X25 Y32)で出土した。

112は白磁皿で、113は内面に蓮花文がある青磁碗、114・115は青磁皿、116は青磁香炉である。112・113は12世紀後半から13世紀代、114~116は15~16世紀代であろう。

116は16世紀のロクロ土師器皿の破片を五角形に加工し、一方の面に「一二三」の数字を、他方に線描がある。どういう性格のものは不明である。

IVまとめ

発掘調査の成果から、遺跡の概要を列記してまとめとする。

1. 繩文時代後期・晚期、奈良・平安時代・中世の遺物が出土し、11世紀後半から14世紀初頭の掘立柱建物・墳墓堂・塙・堀・溝が発見された。
2. 最も古い平安時代後半の掘立柱建物(SB02)は、東側と北側に雨落ち溝を巡らし、西側に池状の溝を配する。雨落ち溝は一部細い部分があり、そこがこの建物の入り口にあたると考えられることから、東側を入り口とする平入りの住居であったと考えられる。

3. 平安時代後半の屋敷は、鎌倉時代には周囲を堀と堺で区画した屋敷構えを整える。堀で囲まれたその敷地は、東西約50m南北60m面積約3,000m²であったと推定される。
4. 墓堂は、正面に池を配したもので、北陸ではこれまで例をみないものである。仏堂の前面に池を配置することは、京都府平等院鳳凰堂や平泉毛越寺などの例に見られるような、池越しに極楽浄土を望む浄土庭園をイメージさせる。おそらく、これを作ったこの屋敷の人は、浄土庭園というものを知っており、また熱心な浄土信仰者であつたと考えられる。
5. 南砺地方は、承暦7(1078)年に京都円宗寺の莊園石黒荘になり、梅原一帯は山田郷と呼ばれた。考古学的にはその頃の遺構の実態は今の所よくわからない。しかしその100年後の12世紀後半になると、梅原一帯ではその時代に相当する多くの遺構が見い出される。また古文書などからも石黒氏や川上氏といった在地武士団の活躍が知られ、この屋敷跡は、その川上氏一族の屋敷であると考えている。一方、当遺跡の北方200mに位置する梅原安丸V遺跡では、平成8年の調査で鎌倉時代の舟着き場と倉庫と見られる建物を発掘した。このことに関しては、文永8(1221)年に山田郷の年貢運送船が近江堅田浦で差し押さえられるとか、延慶4(1311)年に山田郷に倉があったという古文書の記事があることから、この安丸地域に山田郷の倉があったと想定されている〔大山1993〕。そうであれば、この屋敷は莊園の莊官の屋敷であったとも考えられる。屋敷は14世紀前半には廃絶するが、その時期に舟着き場も同様に廃絶していることから、その可能性が高い。しかし、当時の莊官は在地に住み着いていなかったともいわれ、そうであれば墳墓堂のような墓を残すこともなかつたであろう。現状ではいざれとも決めかねるが、安丸の地が、莊園年貢の輸送基地であったとすれば、莊園領主とつながりの深い人の屋敷であったのであろう。 (久々忠義)

参考文献

- 福光町教育委員会1991「富山県福光町梅原安丸遺跡群Ⅰ」
- 福光町教育委員会1992「富山県福光町梅原安丸遺跡群Ⅱ」
- 福光町教育委員会1993「富山県福光町梅原出村遺跡群Ⅰ・梅原上村遺跡群Ⅰ」
- 福光町教育委員会1994「富山県福光町梅原出村遺跡群Ⅱ・梅原上村遺跡群Ⅱ・梅原落戸遺跡群Ⅰ」
- 福光町教育委員会1995「富山県福光町梅原落戸遺跡群Ⅱ」
- 福光町教育委員会1996「富山県福光町梅原落戸遺跡群Ⅲ」
- 富山県文化振興財団1994「梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告(遺構編)」
- 富山県文化振興財団1995「梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告(遺物編)」
- 富山県文化振興財団1996「梅原加賀坊遺跡・久戸遺跡・梅原安丸遺跡・田尻遺跡発掘調査報告」
- 吉岡康暢1994「中世須恵器の研究」
- 山本信夫1995「中世前期の貿易陶磁器」概説 中世の土器・陶磁器 中世土器研究会編
- 大山喬平1993「莊園制」岩波講座日本通史第7巻中世1

V 付論

墳墓堂跡について

久々 忠義

1. 浄土式庭園を模した墳墓堂跡

平成6～8年に、安丸工業団地造成に伴い、梅原安丸IV遺跡の発掘調査を行った。調査の結果、この場所には、平安時代末（12世紀中葉）に始まり、鎌倉時代末期（14世紀前葉）に廃絶した屋敷跡があったことがわかった。屋敷は、西側に幅1.6m南側に幅2.5mの堀がある。平成2年の試掘調査では東側にも堀が確認されており、北側は川が境になるようである。そのようなことから、屋敷は東西約50m南北約60mの敷地であったと推定される。屋敷内には掘立柱建物や塀があり、建物の周りには雨落ち溝が巡り、西側には池とみられる土坑がある。また西側には墳墓堂とみられる建物や木棺墓が残されている。墳墓堂はこの屋敷の主人の墓であり、彼を祀る仏堂が立っていたものと考えられる。

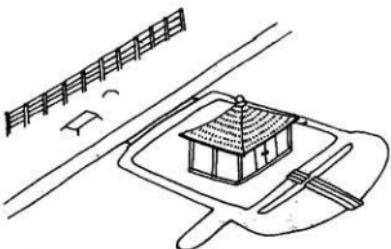
墳墓堂は、周囲を幅70cmの溝を方形に巡らして東西5m南北5.5mの方形区画を作り、そのなかに径約1mの円形の土坑が2カ所ある。土坑内には、火葬骨とみられる白い骨片や灰が残っていた。火葬骨の出土や藏骨器の蓋と考えられる珠洲する鉢が出土していることから、もとは土坑内に藏骨器が納めてあったものが、屋敷の廃絶に伴い遺骨が抜き取られたものと考えられる。区画内には礫群がある。礫群は、土坑の底から10cmほど上の所に面をなしている。そのことから、藏骨器の上部は礫群の上に出ていたものと考えられる。また、区画の西面には、溝の両角につながる幅1.6mの溝状の掘り込みが設けられている。北溝からは北側へ突出する掘り込みもある。これらの掘り込みは、池と考えられる。東面に接する堀との間は一段掘り下げてあり、堀から水が入るようになっていて、周溝及び池には水がたたえられていたと考えられる。

区画内に藏骨器を覆う堂があったと想定すると、この造構は仏堂の前面に池を配し、池越しに極楽浄土を望むという浄土式庭園を思い浮かべる。浄土式庭園としては、京都府の法勝寺・平等院、岩手県平泉の毛越寺・觀自在王院・無量光院、福島県いわき市の願成寺阿弥陀堂などが有名である。池には州浜・入り江などの屈曲を設け石組や築山を配し、中島を設け橋を渡す。墳墓堂の西面の池と方形区画との間にある部分は、中島であろう。北溝から伸びる突出は入り江を表現しているとみられる。西側には池越しに橋がかかっていたと推定される。西側周溝中央の溝底は一段深く掘り下げてあるのは、その部分が橋の幅であったことを示しているものと考えられる。そうであれば、橋の幅は約1.2mである。

浄土式庭園は、仏堂と池の配置の違いで大きく二形態に分けられる。1類は、法勝寺・毛越寺・觀自在王院にみられるように、仏堂が池の岸にあり池に面するものである。2類は、平等院・無量光院・願成寺阿弥陀堂にみられるように、仏堂が池の中島にあり仏堂の周りを池がとりまくもので

ある。この形態は時期差を表しているらしい。平泉では、毛越寺と觀自在王院は、藤原2代基衡とその妻の建立とされ、12世紀第四半期に作られたものとされる。無量光院は3代秀衡の建立で、1170～1181年頃に作られたとされる。願成寺阿弥陀堂は1160年の建立という〔小井川1986〕。その規模においては比較すべきもないが、梅原安丸IV遺跡の墳墓堂は2類に近い。2類のタイプの庭園は、京都府宇治市の平等院がそのモデルと考えられている。

墳墓堂を作った屋敷の主人も、おそらく平等院のことを



第1図 墳墓堂の想像図

知っていたのであろう。また、都への強いあこがれをもっていたか、浄土信仰の熱心な信者であったと推定される。梅原の地は、古代には川上（里・郷・村）の地であり、中世前半には武士團川上氏の本拠地と考えられる。また中世後半には一向一揆の拠点の一つとなった。熱心な浄土真宗の坊主衆は河上衆と呼ばれた。16世紀に強大な一向一揆勢力を生み出した背景として、平安末・鎌倉時代あるいはそれ以前にすでにこの土地に浄土信仰が受け入れられていて、序々に多くの人々に広まつていったということがあるのであろう。池のある墳墓堂の遺構は、そのようなことを考えさせてくれる。

2. 中世の墓と方形周溝遺構

県内において、中世の墓と考えられている遺構は30か所余りが知られる。その姿は、遺体の処理、立地、副葬品や石造物の有無・種類などの違いによってさまざまな形態をとる。遺体の処理では、火葬と土葬がある。火葬の場合は、遺骨やそれを納めた穴や藏骨器が発見され、土葬の場合は、木棺を納めた土坑や石室、土器棺が発見される。墓の立地では、屋敷の一画に設けたもの、集落とは離れた所に設けたもの、寺の一画に設けたものなどがあり、単独で存在するもの、数期が整然と並ぶもの、群集するものがある。鎌倉の「やぐら」の影響を受けたとみられる古墳時代の横穴墓を転用したものや、地下式壇と呼ばれる地下室に埋葬するものがある。副葬品として、銭や土師器皿を埋納したものがあり、五輪塔や板石塔婆や石仏を置くものがある。梅原遺跡群では、安九IV遺跡において、火葬して墳墓堂に埋葬されるものと木棺墓に入れて土葬されるものがある。梅原安九V遺跡と梅原胡摩堂遺跡では、木棺土葬のものがある。島田美佐子によれば、中世前期は土葬されるものが多いらしい〔富文振1994〕。火葬には大量の薪などが必要で、土葬より手間と費用がかかると考えられるから、両者では身分が違うのであろう。その他の違いも、さまざまな被葬者の身分の違いを反映しているとみることができる。多様な墳墓形態の中に、遺骨や遺体を埋納した土坑の周囲を、溝や石列で囲むものがある。方形周溝遺構や方形石組遺構と呼ばれるものである。北陸で発見されている方形周溝の遺構は14か所あまりが知られる。県内では、小杉町上野・富山市杉谷・朝日町柳田古墓・富山市吉倉B・婦中町千坊山・小矢部市白谷岡ノ城北・上市町黒川上山古墓群・福野町田尻・新潟県では座禅塚・千古塚・宝積寺館跡・石川県では梯川・剣崎・宮永ほじ川の各遺跡がある〔北陸中世土器研究会1993・1994〕。『中世北陸の寺院と墓地』などをもとに表1にその概要を示した。

方形石組遺構には、福光町香城寺古宮遺跡、同香城寺惣堂遺跡南墳墓群、同ショウゴンジ遺跡、井波町錢臺山遺跡などがある。筆者は、方形石組遺構については、その上に仏堂のような建物が立っていたのであり、石組はその基壇を意味するものと考えている。その場合、墓の上であれば墳墓堂（開山堂あるいは廟堂と呼ばれることがある）ということになるが、墓とは関係ない堂社の基壇もあると考える〔福光町1993〕。方形周溝遺構の場合も同様に考える。木棺墓や火葬骨の出土から、それが墓と関係があると考えられるものは上野遺跡・柳田古墓・黒川上山古墓群・剣崎だけである。上野・杉谷・千古塚・梯川・剣崎では溝内から大量の糠が出土している。上野・剣崎では骨片も出土しており、安九IV遺跡と共に通点がある。礫群は墓と関係が深いかもしれない。しかし、墓とはいえないものもある。千坊山遺跡は、東西約8m南北約6m高さ約1mの基壇状のもので、周囲に幅約1.8mの溝を巡らす。さらにそれを囲んで一まわり大きな溝が囲んでいる。このような二重の溝が巡る例としては、新潟県宝積寺館遺跡がある。遺構の性格については、堂宇の基壇・塚あるいは墳墓といいろいろな性格を想定されているが、周囲に木棺墓とみられる墓坑が集中することから、それらの墳墓の中心にあり、それらをまとめて祭る仏堂があったのであろう。外側の溝は、その仏堂の敷地境を意味するものであろう。千坊山遺跡では周囲に墓は発見されていないから、神社のような建物が立っていたのではないかと想像する。外側の溝は同じ敷地境を意味するものであろう。田尻遺跡では、周囲を幅2mの溝が巡る一辺約3mの方形区画がある。横山和美氏は、この溝には別の溝から水が引き込まれていたとし、『一遍上人絵伝』

に描かれているような、池の中の島で念佛踊りをする時宗の僧達の姿をイメージする〔富文振1996〕。筆者も溝が単なる区画としては幅広いことや時期が12世紀後半とみられることなどから、溝は淨土庭園の池を表しているのではないのかと思う。梯川遺跡は、溝の二隅が突出して池状となっている。懸仏などの出土から祠跡と推定されている。これらは骨片や礫群などもないので、区画内には仏堂のような建物があったものと考えられる。このように考えてくると、周溝と石組の違いは、石組遺構が医王山などの山麓部に多いこと、医王山の信仰が天台系とされること、周溝遺構が平野部にあって淨土信仰の影響が窺われることから、両者に宗教の違いが現れているとみることができるのではないかろうか。

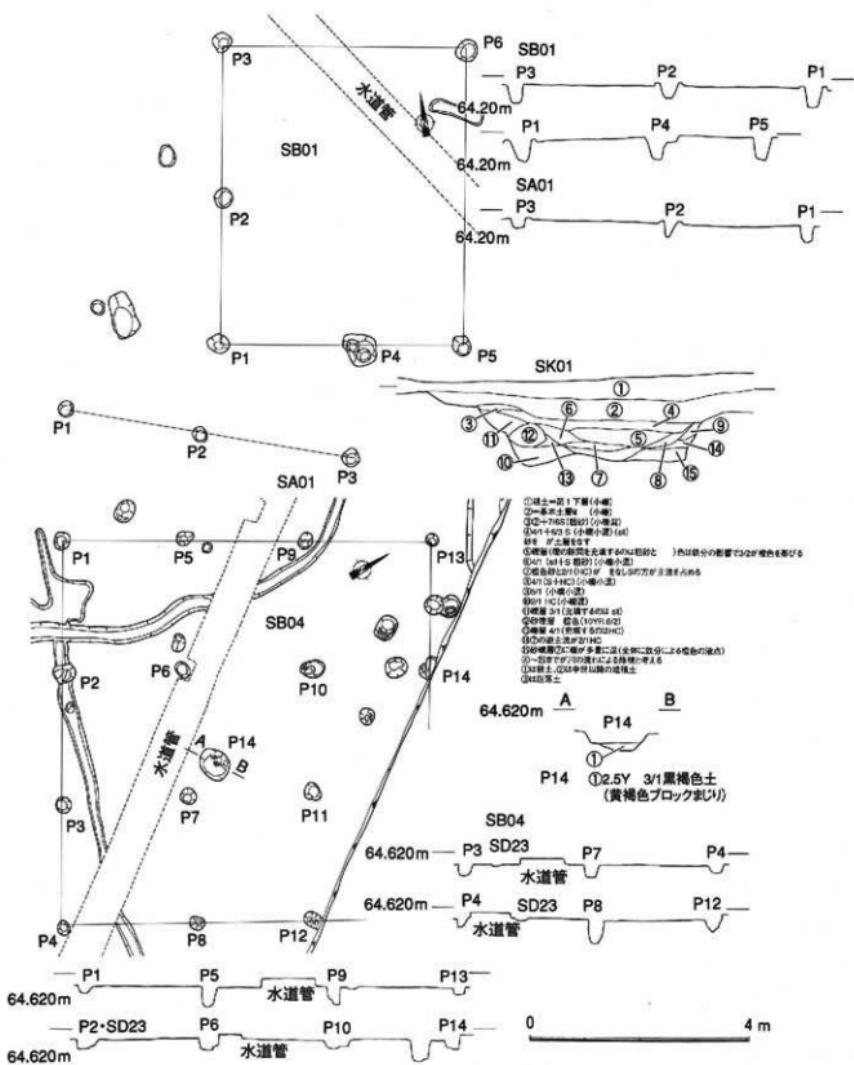
墳墓堂の発掘例としては、1993年に愛知県一宮市田所遺跡がある。周囲を幅2~2.5mの溝が巡る一辺約12.5mの方形区画の中に掘立柱建物の柱穴があり、3間×4間の墳墓堂があったものと考えられている。時期は12世紀末~13世紀半ばという。田所遺跡では、墳墓堂が広い墓域の中心に位置するとみられている〔愛知県1995〕。方形周溝の内側に実際に建物が立っていたことを示す貴重な例である。県内の周溝遺構の内側に建物が立っていたとする確実な証拠はないが、いわゆる土台建てといわれる根太柱に柱を据える建物の建て方がある。小さな堂社であれば、柱穴や礫石がなくても建物を建てることは可能であろう。方形周溝遺構は、墳墓堂その他の堂社の周りを区画し荘厳するものであり、遺骨などの埋葬があっても、それを単に墓といってしまってはその意味を見失うことになる。安丸IV遺跡の場合でいえば、屋敷の主人の墓を中心とした一族の祖先祭祀の儀式の場であったものと考えられる。

参考文献

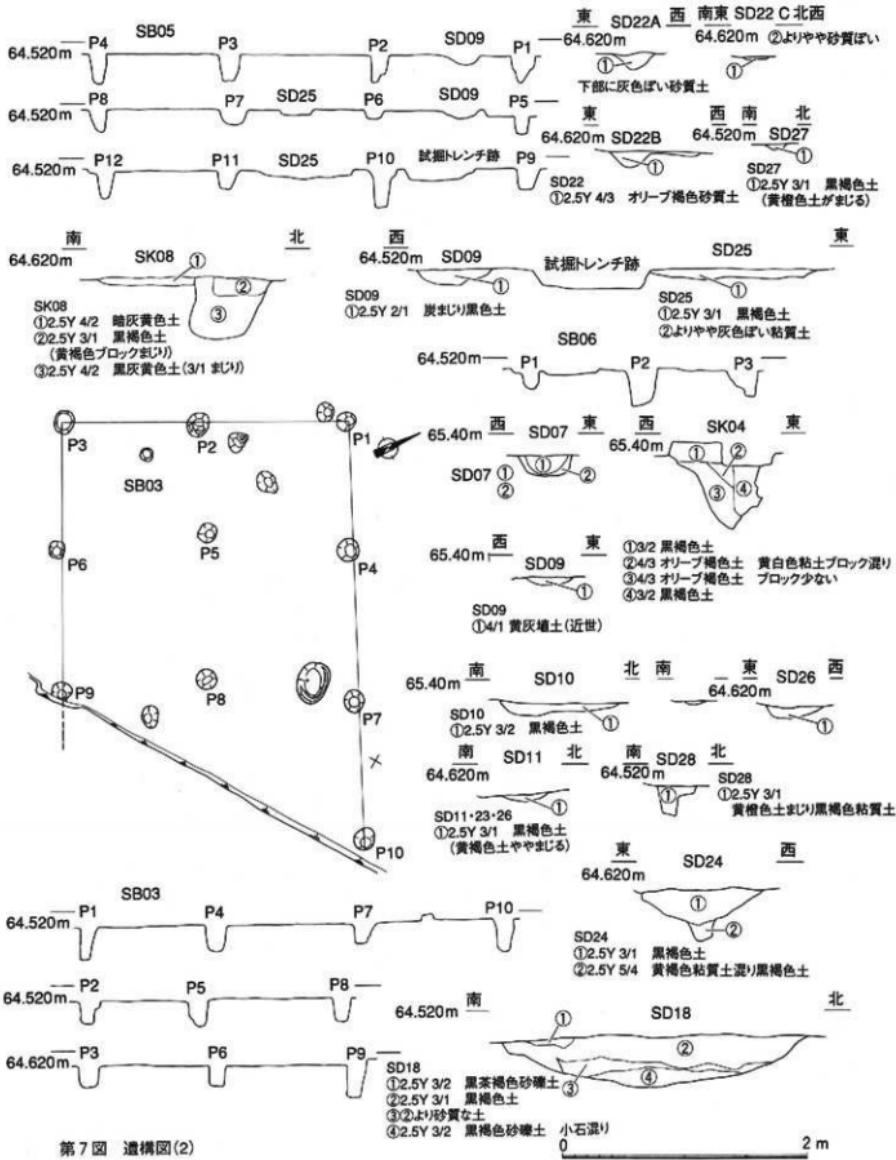
- 富山県福光町・医王山文化調査委員会1993『医王山文化調査報告書医王は語る』
北陸中世土器研究会1993『中世北陸の家・屋敷・暮らしぶり』
北陸中世土器研究会1994『中世北陸の寺院と墓地』
財団法人富山県文化振興財団1994『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺構編）』
財団法人富山県文化振興財団・埋蔵文化財調査事務所1996『梅原加賀坊遺跡・久戸遺跡・梅原安丸遺跡・田尻遺跡発掘調査報告』
愛知県教育委員会・(財)愛知県埋蔵文化財センター1995『愛知県埋蔵文化財情報10 平成5年度』牧 謙治氏報告
小井川和夫1986『奥州藤原氏とその時代』・『願成寺阿弥陀堂』『國説発掘が語る日本史 北海道・東北編』
婦中町教育委員会1995『千坊山遺跡(1)』神保孝造氏報告
上市町教育委員会1995『富山県上市町黒川上山古墓群発掘調査概報』高慶孝氏報告
小矢部市教育委員会1992『富山県小矢部市白谷岡ノ城北遺跡発掘調査概要』山森伸正氏報告
富山市教育委員会1975『富山市杉谷（A・G・H）遺跡発掘調査報告』閑清氏報告
富山県教育委員会1974『小杉町上野遺跡－記録写真編－』橋本正氏報告
酒井重洋1989『富山県内で焼かれた中世陶器』『埋文とやま』第28号
富山県教育委員会1993『富山県総合運動公園内遺跡発掘調査報告(4)』酒井重洋氏報告
富山県教育委員会1975『富山県朝日町柳田遺跡・柳田古墓緊急発掘調査概報』山本正敏氏報告

表1 北陸の方形周溝遺構

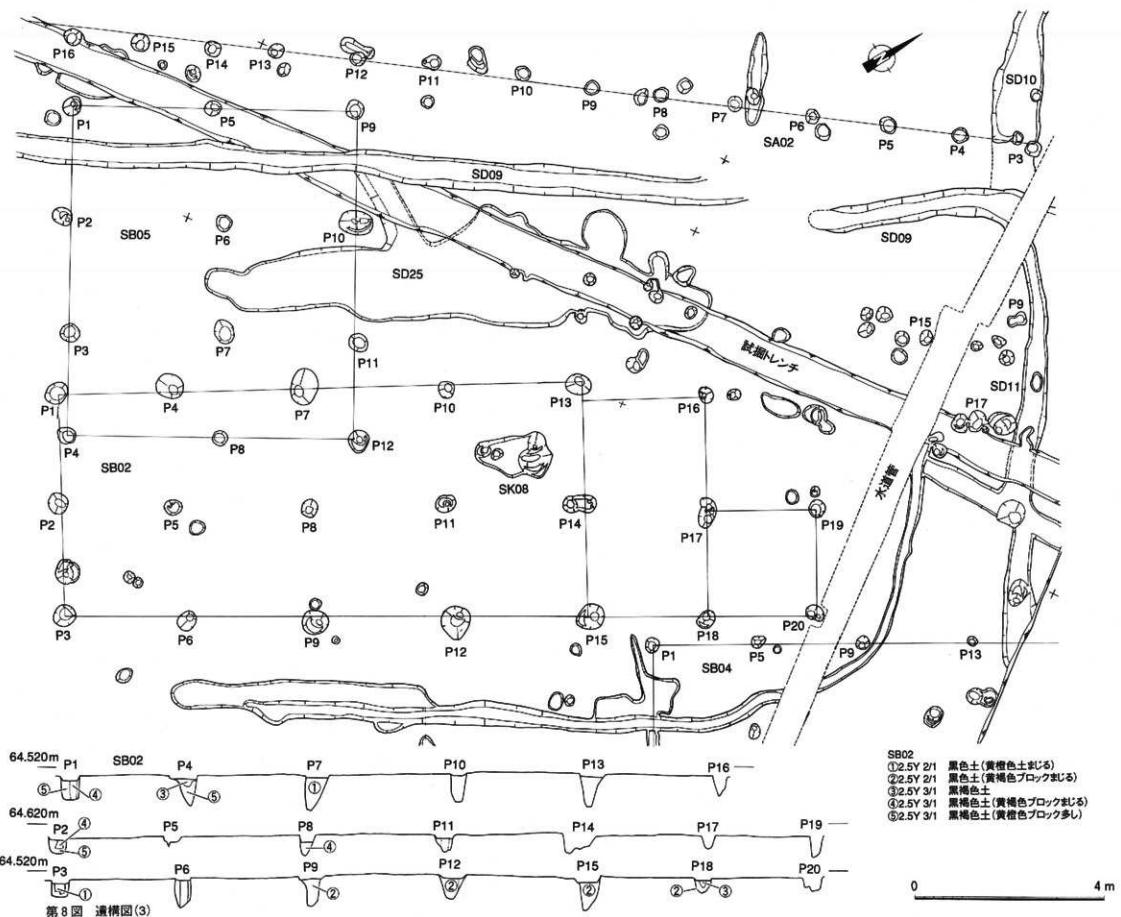
番号	遺跡・遺構	大きさ	時期	出土遺物	特徴・性格
1	小杉町上野 第Ⅰ台地G3方形溝 第Ⅱ台地方形溝		13~14世紀	鉄製品・珠洲焼片 吉伊万里・八尾鹿 瓦頭器・瀬戸磁子 石仏・五輪塔・骨片	中央部に焼土痕・不規則なピット、溝外壁に規則的な小ピット 溝内に大量の礫、墓地あるいは火葬場
2	富山市糸谷方形溝状遺構	一辺5.6m 溝幅80cm			溝内に大量の礫
3	明日町柳田古墓	一辺約10~10.5m 溝幅1.3m	12世紀後半 ~13世紀前半	土師器・珠洲 鐵釘	中央部に石室
4	富山市吉倉B SD31	一辺8m 溝幅1m	13世紀~14世紀		東方外側に基とみられる土坑が数か所ある。
5	姫町千坊山塚状遺構	一辺約12m 溝幅約1.8m	13世紀後半 ~14世紀前半	土師器・珠洲	高さ1mの基壇状、外周に幅2mの溝が巡る。
6	小矢郡白石川ノ鏡北方形 区画溝	一辺4m 溝幅60cm	14世紀	珠洲鉢	
7	上市町黒川上山古墓1号墓	一辺2.5~3m 溝幅3m			溝底からの高さ1mの基壇状、墳頂部は平坦で焼骨片あり。
8	福野町田尻 SX49	一辺2.5m 溝幅2m	12世紀後半	土師器・白磁	周溝に水が引き込まれていたと考えられる。
9	新潟県摩摩塚	一辺5.2m 溝幅1.4m	13~14世紀	珠洲甕	一辺の周溝が二重になっている。
10	新潟県千古塚遺跡 SD11・12・13	短辺5m 長辺7m 溝幅1.5m	14世紀	珠洲甕・甕 五輪塔	北側に島状の方形区画を作る。また南側方形区画が続する。溝から礫が出土
11	新潟県宝積寺館跡溝1~3	一辺8m 溝幅1.2m	15世紀前半	珠洲甕・鉢	北側溝は幅広く不定形な池状、外周に幅1mの溝が巡る。北と西の外側に基壇群がある。
12	石川県鶴川祠跡推定遺構	南北2.9m 東西2.65m 溝幅1.2m	14世紀後半 ~15世紀中葉	懸仏・五輪塔 宝鏡印塔	溝は南側二隅が突出して池状になる。溝内から大量の礫が出土。溝は溢水していたらしい。祠跡と推定。
13	石川県劍崎墓地跡	一辺7m 溝幅1.5m	14世紀末 ~15世紀前半	骨片・珠洲甕 鉢 越前窯 加賀窯 瀬戸磁子 土師質土器 五輪塔 宝鏡印塔	中央に骨片・五輪塔・藏骨器が入った土坑がある。溝から礫が出土。
14	石川県宮永ほじ川42号・65 ~76号溝	一辺約10m 溝幅約1m	15世紀	五輪塔 宝鏡印塔	



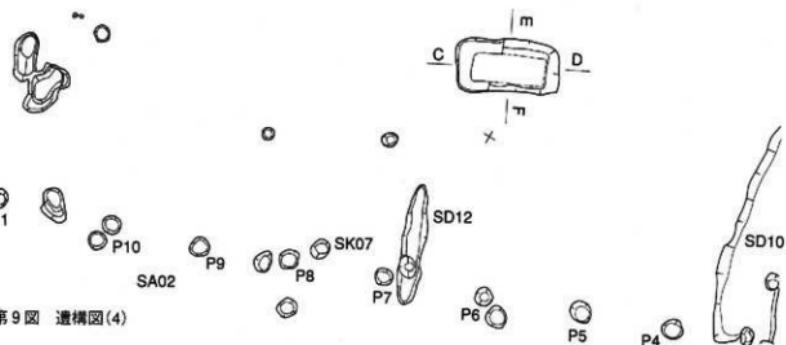
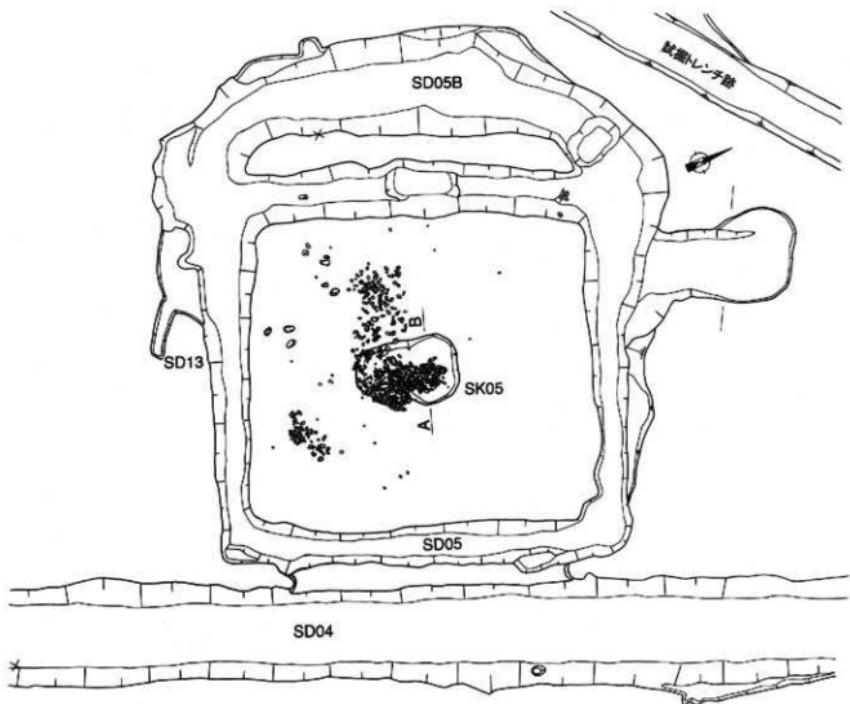
第6図 遺構図(1)



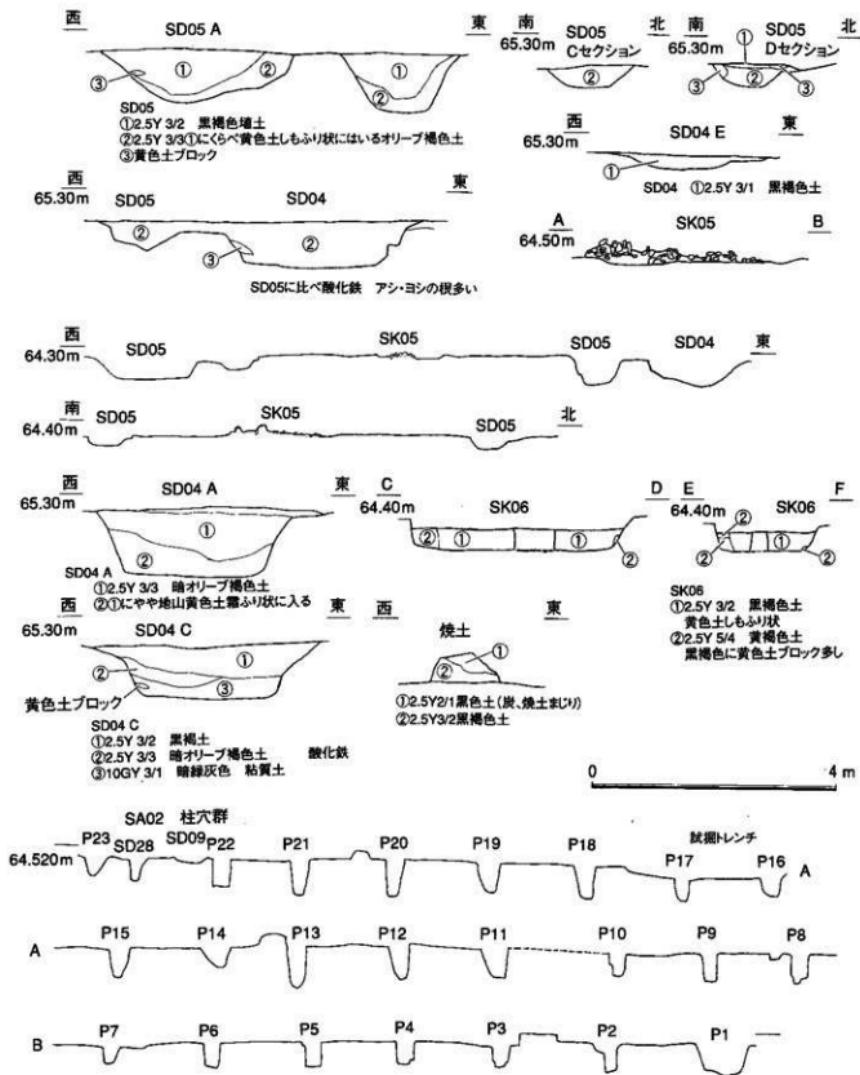
第7図 遺構図(2)



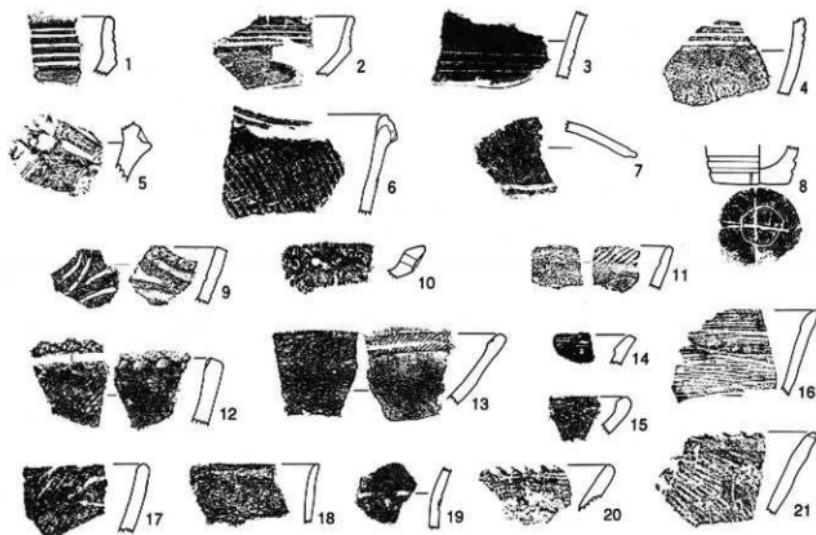
第8図 遺構図(3)



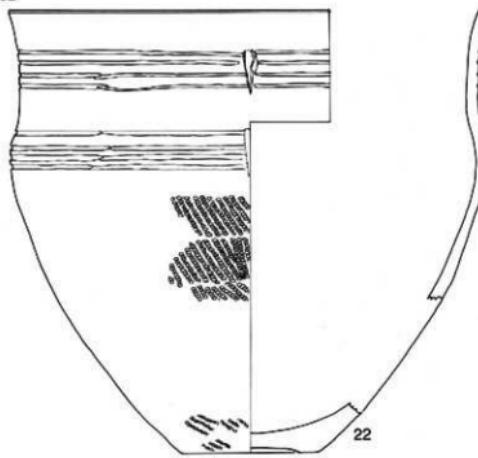
第9図 遺構図(4)



第10図 遺構図(5)

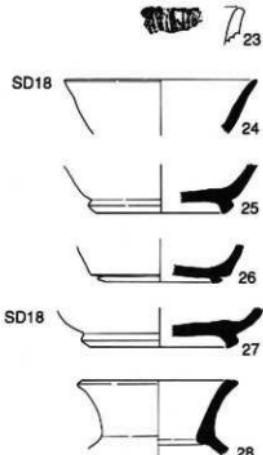


SK02

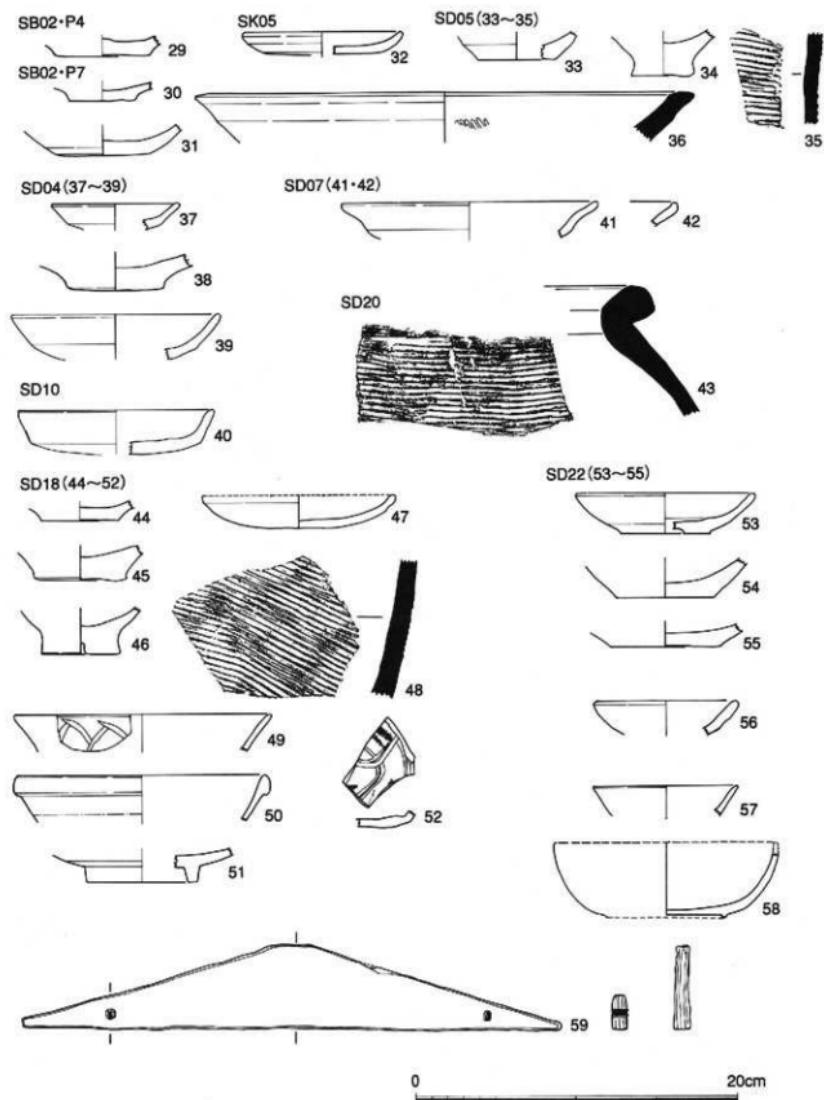


0

20cm

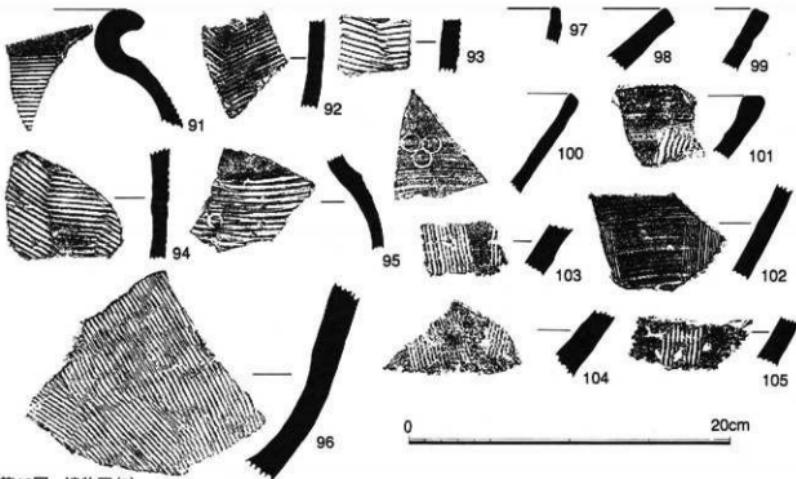
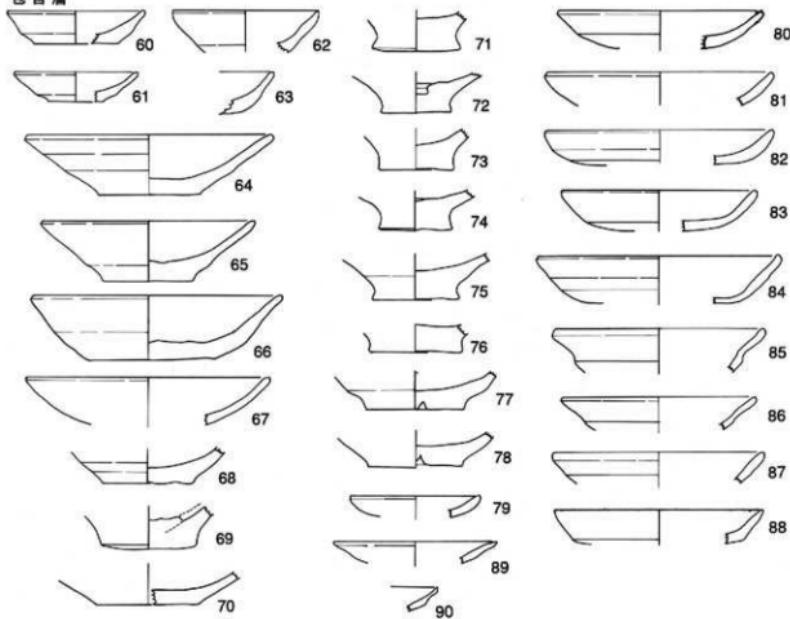


第11図 遺物図(1)

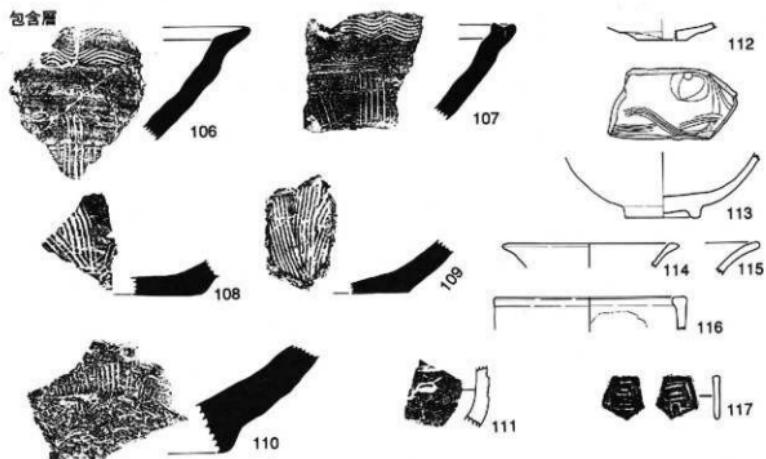


第12図 遺物図(2)

包含層

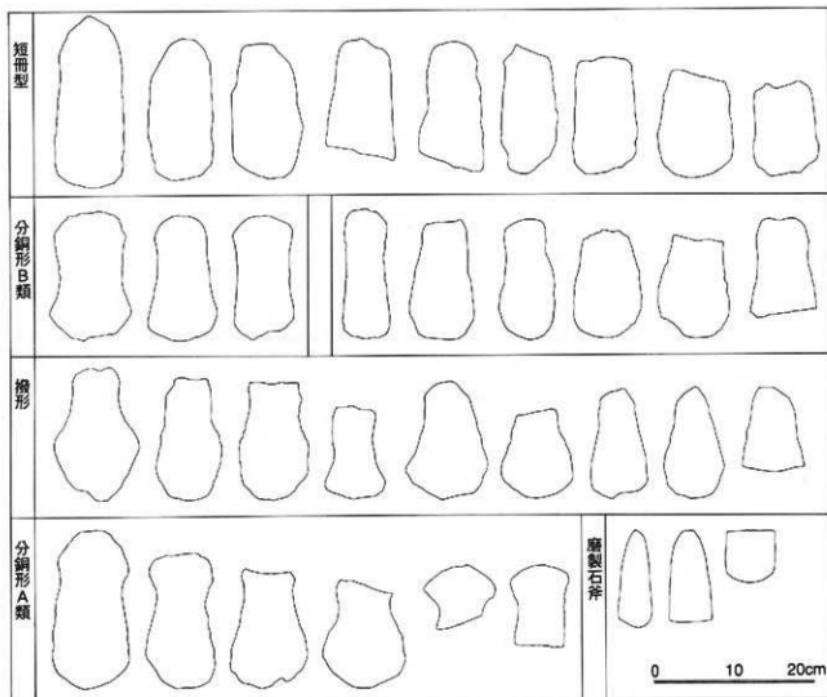


第13図 遺物図(3)



第14図 遺物図(4)

0 20cm

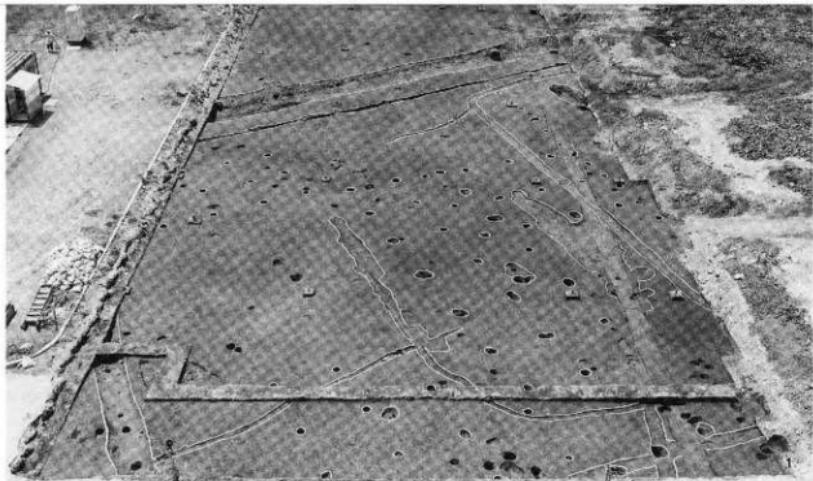


第15図 打製石斧の形態分類

図版1

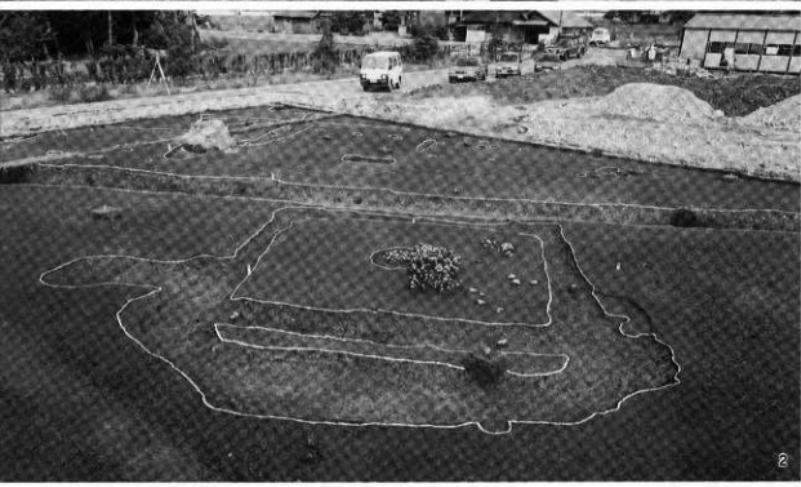
遺構(1)

1. 建物群(北から)
2. 建物群
(西上空から)
3. SB02 (上空から)



図版2
遺構(2)

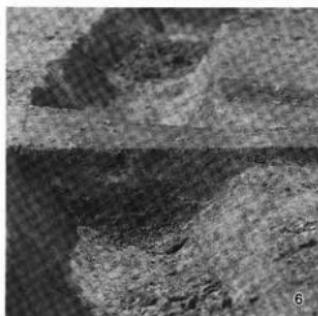
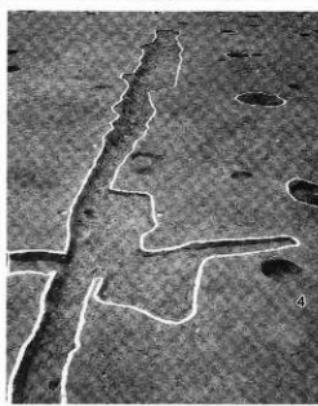
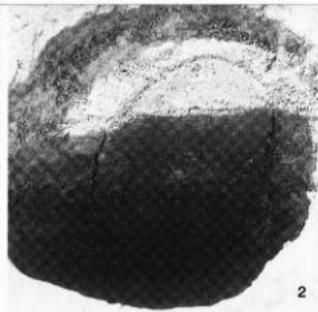
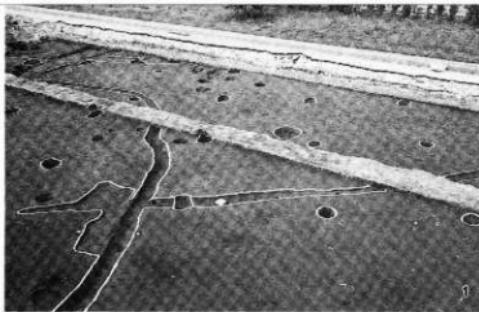
1. 墓堂・木棺墓ほか（北から）
2. 墓堂（西から）
3. 平成6年度調査区（南から）



図版3

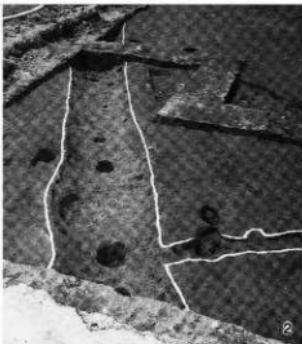
遺構(3)

1. SB04 (南から)
2. SB02P
3. SB03 (北から)
4. SD22南側 (北から)
5. SB01・SA01 (南から)
6. SD22土層
7. SD18・28
(東から)
8. SD28土層



図版4
遺物(4)

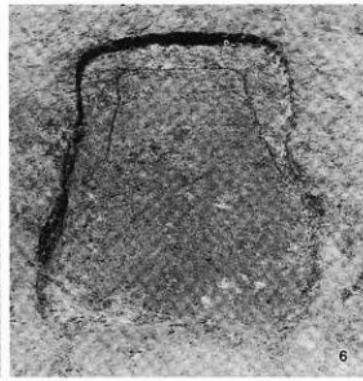
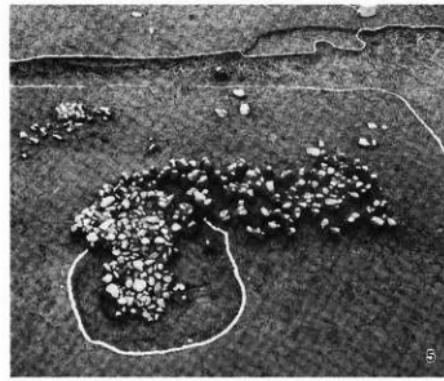
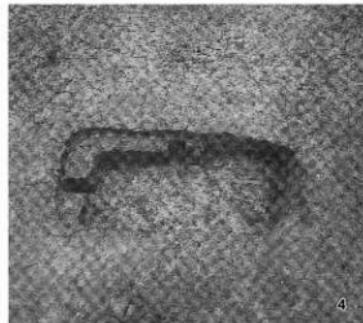
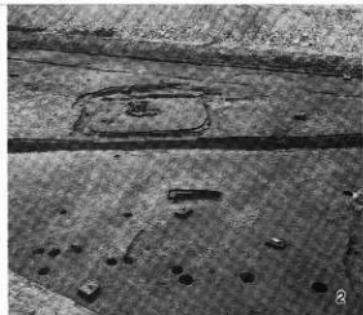
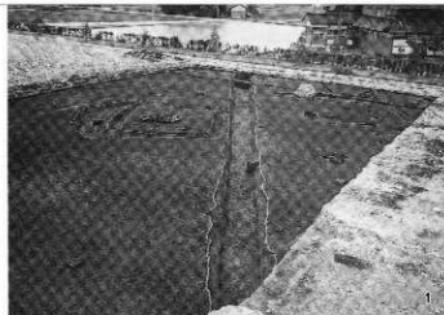
1. SA02・SD09 (南から)
2. SD24 (北から)
3. SD25 (北から)
4. 土師器碗出土状況
5. SK08 (東から)
6. 漆器碗出土状況
7. SD18西側 (東から)
8. SD (西から)



図版5

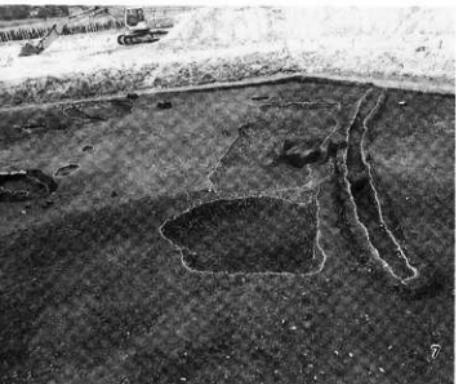
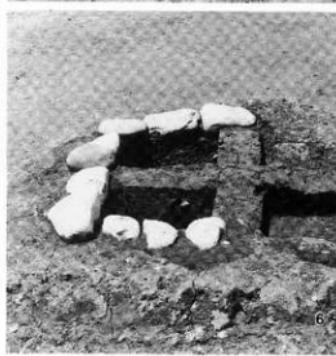
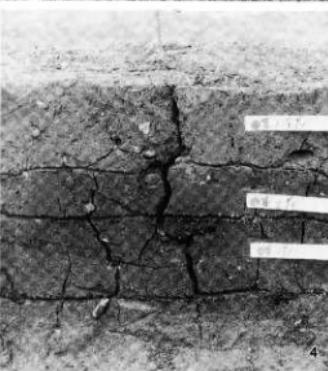
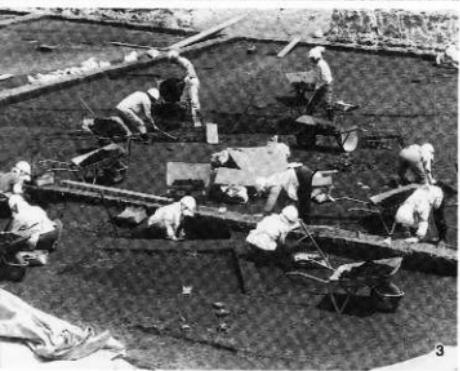
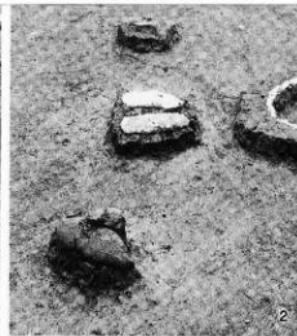
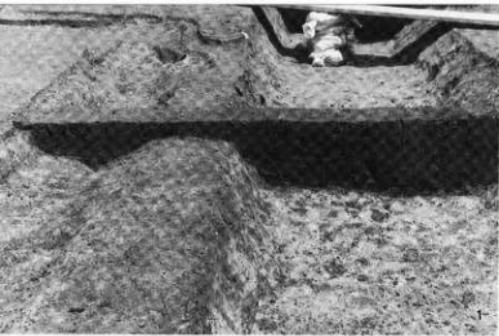
遺物(5)

1. SD04 (南から)
2. 墳墓堂・木棺墓ほか (東から)
3. 墳墓堂池の土層 (南から)
4. 木棺墓 (東から)
5. 墳墓堂集石 (北から)
6. 木棺墓 (北から)
7. 墳墓堂SK05 (西)
8. 墳墓堂周溝に水が入った様子 (西から)



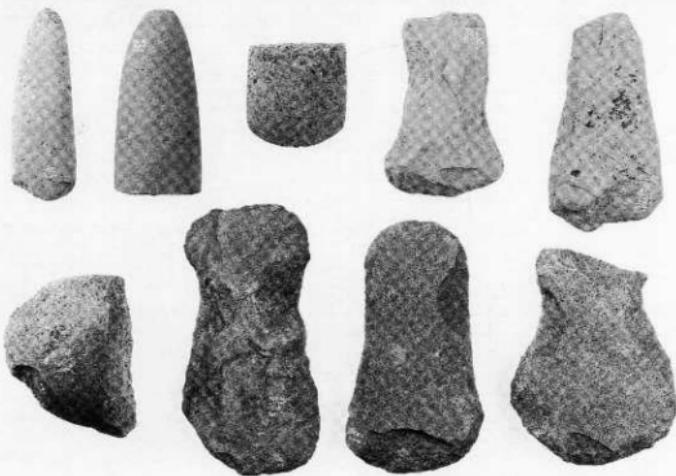
図版6
遺物(6)

1. SD04から墳墓堂周溝へ水の取入れ口（南から）
2. 打製石斧出土状況
炉石
3. 発掘作業風景
4. 基本土層
5. 発掘作業風景
6. 近世以降の排石（東から）
7. 近世以降の堅穴SK01-02（東から）
8. ラジコンヘリによる撮影の様子



圖版7

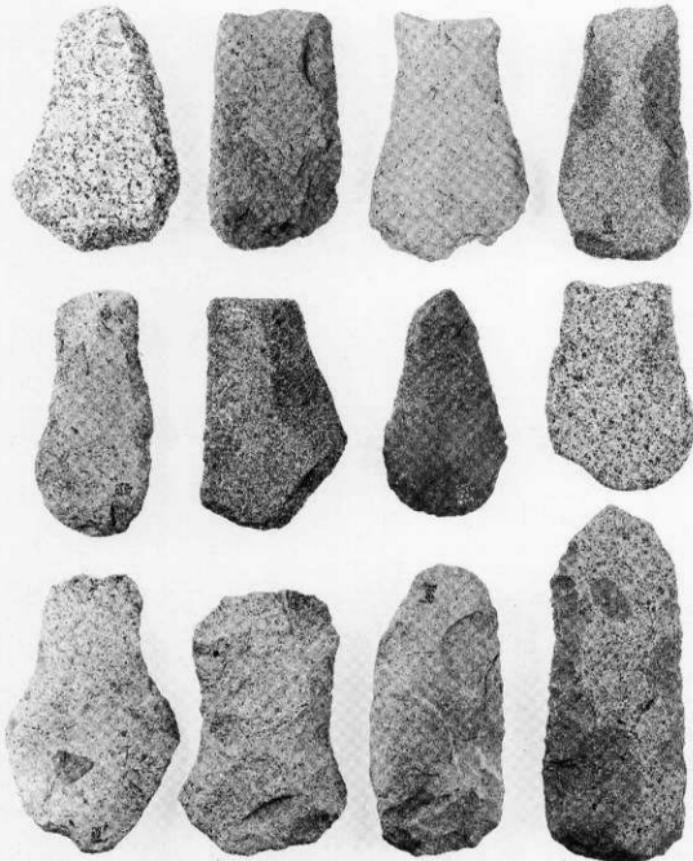
遺物(1)



磨製石斧（左上3点）

凹石器（左下）

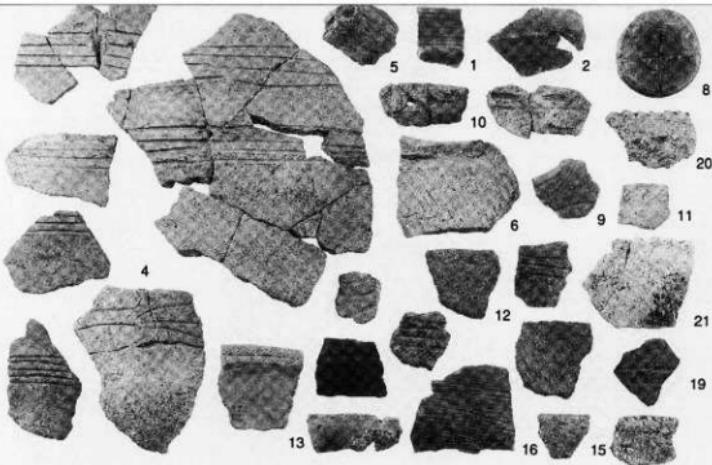
打製石斧



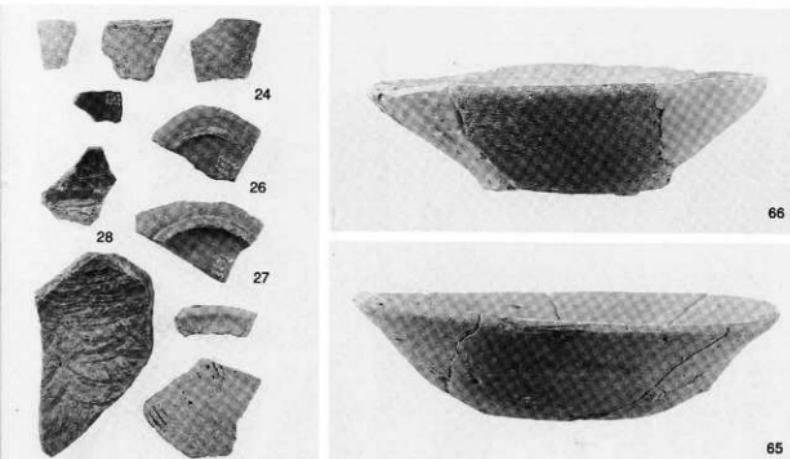
打製石斧

图版8

遺物(2)



縄文土器

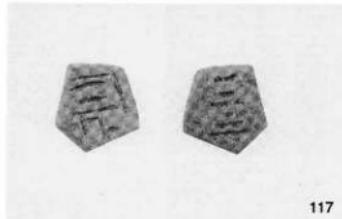
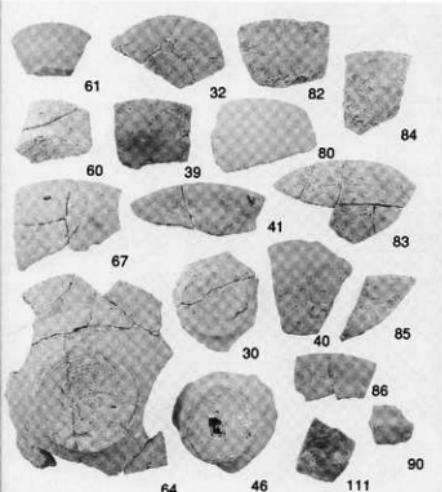


土師器・須恵器

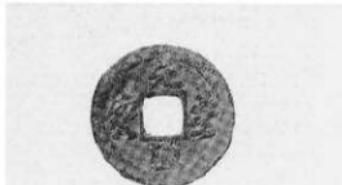
(1 : 3)

土師器碗 (1:2)

土師器碗・皿(1:3)

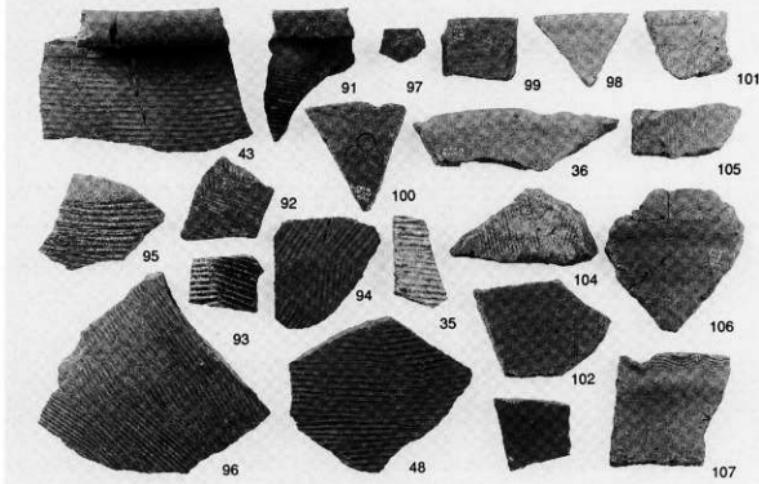


線刻のある土師器片
(1:1)

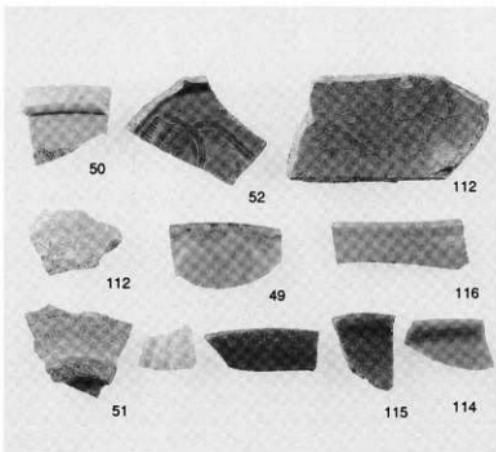


宋錢 (1:1)

図版9
遺物(3)



珠洲 (1:3)

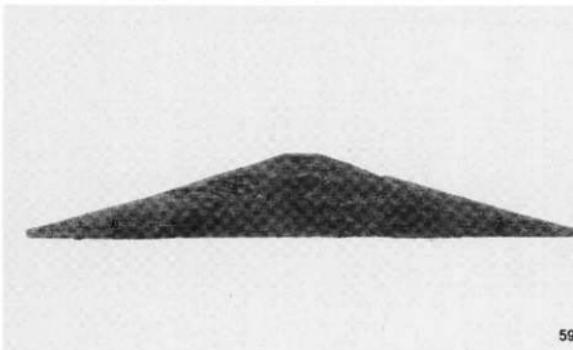


58

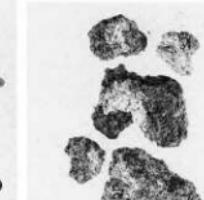
漆器碗 (1:3)



桃核と炭化米 (1:1)



斐ゴ羽口 (1:2)



木製品 (1:4) 骨粉

59

報告書抄録

ふりがな	上やまげんふくみつまうらめらやすらふんいせき						
書名	富山県福光町梅原安丸IV遺跡						
副書名	梅原北工業団地造成に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告						
編著者名	久々忠義、佐藤聖子						
編集機関	富山県福光町教育委員会・富山県埋蔵文化財センター						
所在地	〒939-16 富山県西砺波郡福光町荒木1550 TEL (0763) 52-1111						
発行年月日	西暦1997年3月31日						

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °°'	東経 °°'	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
梅原安丸IV	富山県 福光町梅原	16421	171	36度 33分 55秒	136度 54分 10秒	第1次：940509～940610 第2次：950508～950616 第3次：9604～9605	1,140m ² 1,300m ² 1,324m ²	町工業団地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
梅原安丸IV	集落	縄文時代 奈良・平安時代 中世、近世	第1次：掘立柱建物 1棟（鍵倉時代）、 土坑1基、石組1基、 溝（近代） 第2次：墳墓跡、 焼土穴、堀、橋跡、 柱穴（中世） 第3次：掘立柱建物 5棟、周溝柱穴、溝	縄文土器、打製石斧、敲石（縄文時代）、 土師器、須恵器（古代）、中世土師器、 珠洲、八尾、越前、青磁、白磁、砥石 (中世)、陶磁器、木製品（近代～近世） 縄文土器、打製石斧（縄文時代）、土師 器、須恵器（古代）、珠洲、青磁、青花、 中世土師器、フイゴの羽口（中世）、越 中瀬戸、伊万里（近世） 縄文土器、打製石斧（縄文時代）、土師 器、須恵器（古代）、中世土師器、珠洲、 越前、青磁、白磁、漆器椀（中世）	

梅原北工業団地建設に伴う
埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告

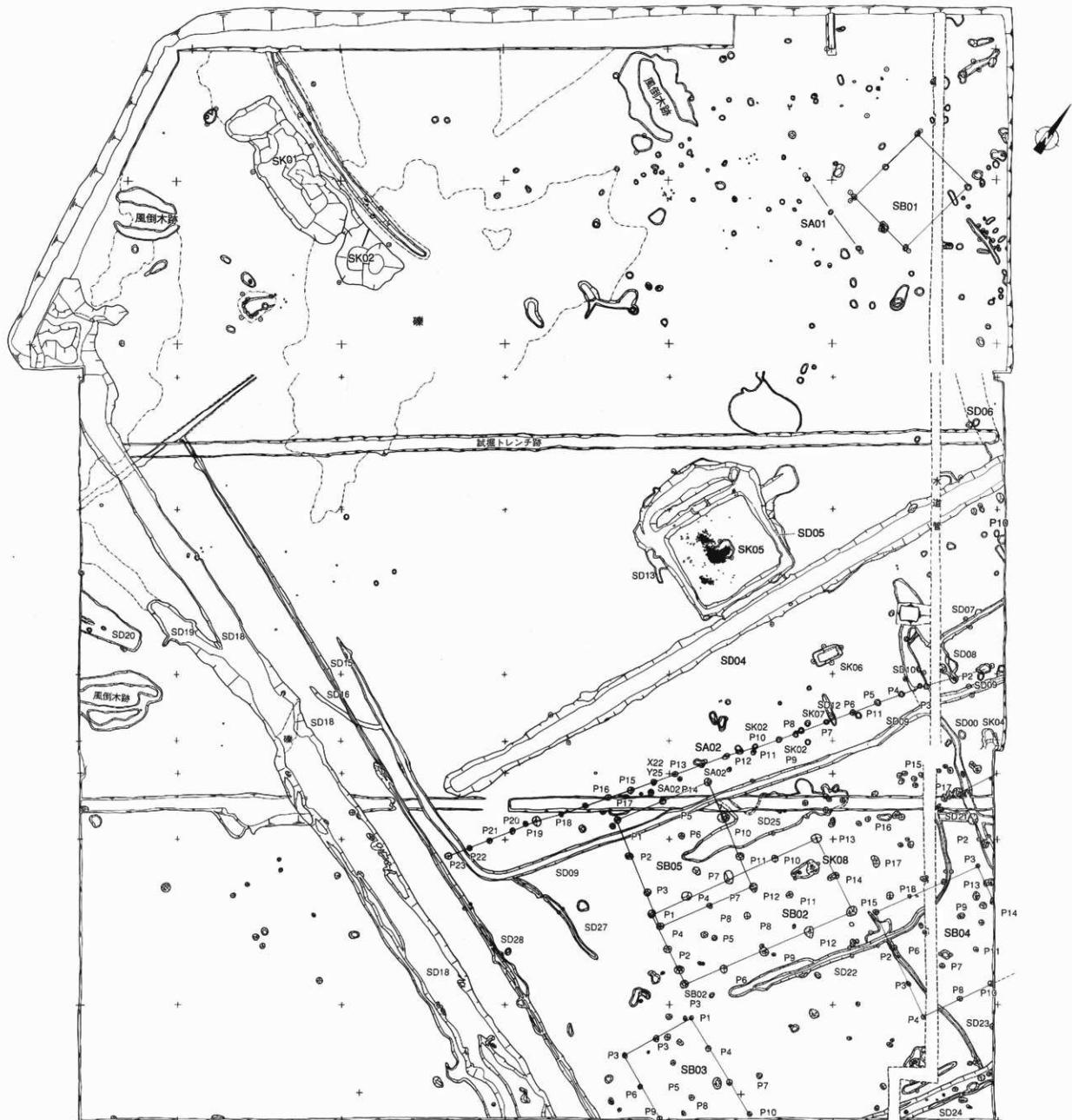
富山県福光町 梅原安丸IV遺跡

平成9年3月28日

編集 福光町教育委員会
富山県埋蔵文化財センター

発行 福光町教育委員会

印刷 研波印刷



付図 梅原安丸IV遺跡遺構配置図 (1:200)

印 刷 硬波印刷

